7371

錦城齋貞玉口演

加藤由太郎速記

歌詩 俊德丸

講談百冊ノ六

東京文華堂發行

097203-000-1

特8-672

俊德丸

錦城斎　貞玉／講演

M30

DBS-1016

438
627

俊德丸

講談百册 卷之六

俊德丸

錦城齋貞玉講述
加藤由太郎速記

第一席

近頃講談速記のみと大層に行なはれまする、尤も速記者の敏腕を以てせば同じく字も漏らさず現はし升るみと故、講談を其儘御聞に成るは、夫れに就き同業社會が澤山種々の種を講演いたしまして近頃の小説には餘分忘説もあり升る、未だ充分の學力も無くして小説抔を書く人があり升から昔しの小説の中に當時流行の漢語抔を入れましたり、徳川時代の言葉迄中に君だの僕だのと云ふ文字を入れて怙として顧づ、乃公は明治文壇社會の泰斗だ抔と威張つて居る若手がある實に片腹痛い理由

で其所へ行くと講談迄記の方は罪がありません、固より文章を飾るに非づ只有の儘を顯はし升る所謂其物其儘であり升から大きに世に行かれて来たので御座いませうか、と理屈を云ふに貞玉學問があるやうで御座い升が決して然ふではありません

然し俊伯にして貞玉の書籍が是れ迄種々出ましたが皆人情世話講談然るに今国は少き風が代つて說出だし升るのは極く古いお話しで御座いまして是れは元亨年間に起りましたる講談、北條九代の中則ち高時の時分のお話し、川柳の穿ちに

康い時儲けて高い時潰れ

抑も北條は時政よりして九代と云ふもの續きましたが先づ三代目が六ケ敷いもので商人の中でも

貢すへと唐様でかく三代目

三代目にして身上を潰すか又三代目にして身上を起すか、何ん

でも三代目が六ケ敷い然るに此北條の三代目康時と云ふ人は

宮に賢人で御座いました夫れに續いて四代目の時頼、是れも明君、其が爲に九代迄續きましたが又徳川公も家康公よりいたして天下を握り、三代目家光公が明君であつた引りに十五代の基礎を堅めました夫れだから三代目は六ケ敷い前に鳥渡述べた川柳の穿ちは此康時と云ふ人は、何うも夫れは容易ならぬ苦心をして天下を得ました、然るに高時の世に成つて己れの了見迄ひから遂に北條を潰して仕舞つたので然れば易い時儲けて高い時つぶれ誠に世の人情を能く申したもので、却て說爰に北條高時と云ふ人は尤も武將で御座います、時に花園院様の御宇に當つて武臣にて北條相摸守平高時と云へるは此方で御座い升時の執權職と有がれ、四海の政權を握ると雖も輕忽にして智慧薄く殊に驕りを好むの大主、由つて只今迄四民北條氏を怨つて

居りましたが自ら心離れ、何と無く北條氏の權地に墮ちんの有様愛に元享三年七月七日の事で御座います是れは七夕の節句と云つて日本古式の一ッ、此の日諸大名一門悉く高時の館へ集まりまして正面には時の執權職北條高時左右には諸大名、並いて一家一門家の子郎黨に至る迄綺羅星の如くに居並び北條家の万代を祝しました此の時高時大音を揚げまして

高時「如何に方々今日七夕の節句といたして斯く皆々予が館へ集り呉れたる高時過分に心御ます其御挨拶に並びし人々一同會釋をいたしました高時再び聲を發しまして

高時「就ては來年七月十八日は右大將頼朝公御盛先祖如寶尼公の百年期に相當いたす抑も北條一家今四海に名を轟かせ國政を握り榮曜榮華をいたす事を得るも偏に先祖尼公の庇蔭あれば高時大法事を取行ひ御年回を弔らはんと心得候故方々へ御相談申す此儀如何に候哉。と

扨と叮寧な御言葉で御座い升此折進み出でましたる一人の男子

甲「如何に執權の御言葉御道理にて候なり、日本武將の濫觴と云つて然るべき頼朝公御他界ゐ相成つて後は實朝幼年に付尼將軍と人に云はれ久しく四海の政權を握り、尤も尼公は男子も及ばぬ所の御發明夫れに又御先祖北條時政殿は尼公様へ對し奉り、尽く御一臂を添へ遂に今日の榮を見るに至る、其の尼公様御年期を御弔ひ遊ばされんと云ふは尤も宜しき御事にて候なり人間は榮曜榮華は夢の間の樂み、後に至るも害あるとも益無きゑと、法事供養は万々世の後迄も功德と云つて然るべく誠に御賢慮恐れ入り奉り升る。と大奥に呼はりましたが是れなん、實は胸中に今高時が餘りに權威を振ひ遂ゐは少しく武威は劣り只驕りに長じ淫酒に耽るのを盡く心配いたすと雖も夫れを意見を爲たなれば諫言美ならづ、良藥は口に苦し、徒らに怒りを増

して斯も暗君で御坐い升から如何なる憂目を見んも計り難く憂目を見るは眼はねど命に替て意見をする者も無くなつて仕舞うであらう如何して御意見申上げんかと思つて居る所でありましたから法事に事寄せて嫌味ダップリに夫れと無く御意見申上げたので御坐い升去れど高時「更に心注かづ　高時「フヽ如何にも御身の申されたる段高時滿足に存ぞる、夫れに就て此度の追善には万秋樂の音樂を以て供養し奉らんと心得候、然れども此舞樂の奥義を極めしもの甚だ稀なり由つて御身等何國にても十五才以下に爲て右万秋樂の音樂に達せし者を尋ね早々に右の由申付くるやうに……。と仰せられましたる時に長崎圓喜が長男新左工門尉高次此所に進み出でまして　新「仰せに及ぶべき拙者是れより高次此所に進み出でまして　新「仰せに及ぶべき拙者是れより諸國へ法令を發し速かに右の舞樂に達せしめ申付くるやうに……。と仰せられましたる時に長崎

早来年もハヤ五ツ、りつらん、速かに相尋ね候べし。と御受けに及ばれた高次の言葉をお聞遊ばして高時も悦び、玉び先づ其日ハ一旦祝して互ひに館を退きましたが夫れより新左工門尉は家の子郎黨に申付けまして段々に相尋ねましたゝスルと安に河内の國高安郡山畑と申す所に信義長者と云ふ者がムいました、是れは先づ當今申しまする農でも御座いませうか此時分昔し大名で其世の中に仕へるのを嫌つて自ら百姓と成つて居つた者もありました此信義は自分の先祖は是等の人であつたか如何にも以て大家で御座います其信義長者に二人の子が御座いまして父が殿しく此二人の悴を仕込みましたから此道には至つて長じて居りました尤も其時分は舞樂が嫌んの事で御座いまして殊に北條家は舞樂を如何まれたから從つて下々にも行なはれて居つた然れば北條舞樂と言ふ流氣さへもありました位

い其外郷樂にも其頃は色々ありましたが是れを述べるとくだ〳〵しう御座い升から述べませんが其折左衛門尉是れを聞知りましたに由つて早々君の御前に出で此由を高時公に申上げました　高時「夫れは何國の者である　新「去れば河内の國山畑の郷に居り升る者で身分は決して賤しき者に非ず家來眷族も許多あつて田畑は猶更多くの豪家で御座い升殊に品格は固より品行も正しく執權の御前に出でますとも何んぞや耻る所が御座いませう舞樂には固より達し居り升る由、是れ適當の者と存じ候間早々に御召しあつて然るべく……。と言葉の下より高時は尽く御悦びおされ　高時「速かに其信義なる者を召せよ。との仰せに由つて其所で新左衛門早々に使ひの者を遣はしました其使ひと申するは林主馬と申する者で御座いまして是れより其國を立てハヤ河内の國へ乗込んで参り、高安郡山畑の郷へ

來て見ると今しも農民は野良仕事の真ッ最中　甲「ヲーイ源左衛門　源「エ、　甲「何んじやなア乃公達が斯ふやつて毎日〳〵仕事をして無事に其日が送れるのも長者さんの家があればこそ三百六十五日飯が喰へるんだノー　源「然ふとも〳〵、長者はんが無かつた日にやア私共は妻子を養つて往く事が出來ないに就ちやア此頃は何か恐ろしい長者はんの家が賑かだなア　甲「ウム然ふだ〳〵お前知んねへか　源「乃公ア知んねへが何んだ○「今度執權様の所よ何かお牙出度へ事だか何んだか知んねへが何かあつて其所へ長者はんの息子はんが二人呼ばれるんだとヨ　甲「ウムー何があるんだ　源「何んだか知んねへが執權様の前へ出て長者さんの所の御子さんが踊るんだとヨ　甲「ヘエーじやア乃公でも好かんべい盆踊りを遣るんだらう　源「盆踊りじやア無へ郷樂とか云ふもんだろうだ　甲「ヘエー妙な事を

遣るんだなア。と林勇馬が供方を多く從へて後に立つて居ると
は知らぬ百姓が野良で話して居る大きな聲が耳へ這入つたか
ら　勇馬「アヽー……シタ見ると執權が召されるゐとを述くも
傳へ知つた事か物は隱せぬものである……コリヤ〳〵農民。と
呼ばれて大勢が回顧つて見てあれば馬に乘つていかめしき所
の侍數人此頃は未だ太平とは云ひながら大業な强盜が白晝横
行した頃であり升からイヤ百姓は慧くまいゐとか一人が突然
甲「ヤー土坊ヨ……其所へ土坊お來た。と逃出したから　勇「ア
是れ〳〵決して吾等は盜賊では無い、コレ農民ヨ。と怒鳴りました
なれど一人が逃出した事故に吾れ先きにと林勇馬の言葉は耳
にも入れづ、ドン〳〵〳〵〳〵逃出して甲は寺へ馳付けて往つて
早鐘をゴン〳〵と打つてはお家へ駈付けて竹ボラをボー〳〵
吹立てましたから何んにも知らぬ農民共も此音色に驚いて共

に唯怪き騒いで居りました、奈是斯樣な騒ぎをいたしたかと云
ふと只今も述べたる如く其頃は稍々ともすると大勢黨を組ん
で農家の内でも奈農と見ると白晝亂入して押借り、或は强盜抔
をするゐとがありました其が爲にモー少し異形の姿をして居
ると農民共が賊と心得ました由つて斯く騒ぎ立てましたるは
强ち無理でも無い、此折り林勇馬は聲を激まして　勇「待て〳〵
一同騒がつしやるな吾は決して强盜に非ず、扨て〳〵愚かな
る村の者かな部まれ……沈者け、早計るゐ。と云へども更に靜な
る樣子も無し。此折信義が家來速くも夫れと覺つて大きに慧き
其所に馳付げて參つて　家來「コレ〳〵皆の者待つた。○「
ヤー長者樣の御家來か其所へ來ゐすつたは土坊や〳〵マゴマ
ゴして居ると切られて仕舞う逃げなはれ。信義の家來某し
ば　某「イヤ待つた一應相尊ねるに由り和郎遠抵抗をしては相

成らん、夜分は兎に角白昼に盗賊來るべき所間無し　甲「イヤ夫りやア不可ん盗賊と云ふても強盗は其様な事は搆ひんから……。と一人が云へば又一人各々に勝手な事を申して居り升る

家來「ヤア夫れに參られたる御是れを止めて夫れに立上がり武家方姓名を名乘られよ何處の何んと云ふ者なるや助の如く百姓の立騒ぐは決して無理なるに非ず先日十八人の強盜信義方へ忍入つて許多の金銀財寶を奪い去りしに由つて此村の者は兎角異形の姿をなしたる者を怪しむかり御身等敢て異形と云ふにはあらねども武家を知らぬ百姓共何れの御方に候や御姓名を名乘り玉ひ

勇馬「道は道理なる御一言……。と勇馬は馬より降りまして左りの手にて轡を取り　勇「手前方此度當處へ參りしは餘の儀に非ず就ては北條高時様の御使者で御座る

家來「ハヽア　勇「長崎圓喜が長男新左衛門尉高次が家來林勇馬

と申する者信義長者に御面會を仕り高時様の御言葉申すべし……ヤヨ方々無禮をいたされな神妙にいたされヨ。と言葉の下より信義家來　家來「ハヽアはて執權様の御使にて候ふか……方々騒いでは不可ん此度は北條様の御使者だ、盗賊共の騒ぎじやア無いと聞て百姓共は大きに驚きまして　百「ヤレコレ茂兵衛さん……茂十さん勝兵衛どん家いあとがでけた執權様の御使者に向つて物取りや、土功や……と云ふたが何んとしたらば好からう此りやア剛いあとが出來たと固より正直一遍世間知らずの人々が驚きまして遽てゝ鋤を投出し、マンガを棄て竹鎗を折り一人二人と逃去りました打笑ふたる林勇馬　勇「言に道理なり性は是れ善なる者剛氣朴訥仁に近し、彼の奏も面白し〳〵是れより信義が屋敷内に案内をいたして兎に角客席に勢しまして茶菓を待遇し馬は厩に繋ぎ、驅て長者は夫れに出迎

ひまして挨拶終り　信「執權様の御使ひとして如何の儀に候哉　勇「此度執權様は來年七月十八日右大將頼朝公の御靈二位尼公百年期に當り、大法會を執行ひ御靈魂を吊ふ夫れに就き日本神代を過ぎ世々万々歳、万秋樂と云ふ音樂あり夫れを以て供奉し奉らんと高時の思召しに由つて日本六十餘州何れも此万秋樂の音樂を極めし者あるやと御尋ねの折主人新左衛門尉殿て當地長者が兩人の御子を持ち幼年なりして樂より尽く心を入れ玉ふ事を充分に探知いたした、是を上甲なす所御悦ひ速かに信義を召せとの御沙汰山つて御使口上斯の如く御受に及び長者ヨ拙者と共に速かに參上あれ今我國に此上も無く万秋樂の音樂にて其許の芳名を輝ずは此時にあり速かに參上あれヨ。と笑を含んで林勇馬は諫めつすかしつ仰せられると信義　信「ハッ。と御受けをして　信「道は有難き所の

執權様の御上意、速かに御供仕らん。と其夜は林勇馬に尽く馳走をいたし其夜は明げる爰に二人の子がありまして嫡男を俊丸次男を乙野次郎と云ふ、此兄弟を膝近く招き寄せまして　信「ヤヨ兩人此度執權様御館に於て頼朝公御靈尼將軍の百回期御供養を遊ばすに付て万秋樂の舞樂を以て供奉し奉らんとの仰せなり其舞樂をなす者汝等兩人より外に無しとのよと、昨日御使者當家に能々御越しあつたるは其方等も承知であらう家の面目、此身の面目汝等兩人が出精の端緒速かに御受けに及ばれるやう。と云ふのを聞て兩人は　俊「道は父上様有難き所の仰せを蒙むるものかな併せの如く家の面目、此身の譽れ有難く御受けに及び升る信義も滿足の思ひ其所で長者は林勇馬と共に是れより河内の國を立て道中別段のお物語りも無く北條家へ着いたし高時公の御前に立出でました扨て新左衛門尉高次が案

内に由つて信義長者は高時御前に出でましたる時に高時の御言詞は「汝に兩人の子あり何れも舞樂に長じたる由、由つて來年七月は万秋樂の音樂、予が前にて充分にいたされヨ此儀其方に頼み入る……。」との御言詞で御座い升から有難く御受けを いたして是れより御前を退がり、夫れ〳〵係り役人に御禮を述べました信義は日ならず本國河内の國へ立戻りました是れから兩人の悴を迎ひまして　信「扨て悴共舞樂だが此の万秋樂の舞とゝ云ふのは未だ全く日本には無き此樂を日本に躍めし者は堺通坊富士と云へる者より外に無き由、未だ其方達は成程舞樂には親の慈目が達して居るには相違無げれど万秋樂の樂は傳授されん此りやア富士に就て傳授して貰うより外に詮方は無し未だ餘程日限もあるから……。」と信義は折く考へました夫れに付き家の子始め山畑郷の農民共も

此度長者が御子兩人が日本に名を輝かせる時節到來一門一家眷族まで勇み悦び祝ふ聲まで勇ましく又國國よりも長者の家へ入髮り立髮り門前に市をなし囃き渡る賑はしさ然るに或一日長者が家來春藤兵衛之正仲滿長者の御門を退ぞり自宅へ歸らんと立出でる所へ一挺の乘物が參りました今此長者が門内に入らんとするの樣子夫れには供人も七八人　仲「這は何れの御方かゝるか珍らしき所の御客來……。」と仲滿門前に立上つて樣子を見れば案内も乞はづして門内に入らんといたし升から仲滿是れを支へんと思ふ所へ相家老の手塚勘左衛門國辰附添へ若黨を先へ追遣り　若「千草樣御入り……。」と呼はりました門番驚て正門を披き、ズーンと這入つて其儘乘打ちで玄關へ上がらうといたしましたから仲滿傍へ馳寄つて　仲「アイヤ是れはしたり勘左衛門どの抑も乘物の内は何人で御座るか……最初の

御客飽れも無く猥りに此長者が御門殊に平生は西門を以て通用に爲す然るに大切なる所の正門の左右の扉を開いてお下りも無く眞打ちは無礼の人かなゝシテ亦御身は當御客の法を存じながら御身が先立ちの案内とは如何の次第で御坐る。聞くより勘左工門は目を見張り　勘「エヽ、要らざるゐとを仰せられるなお扣へなさいお扣へなさいと云ふ勘左工門と云ふのは至つて奸悪の曲者仲滿は正直一遍何れに於ても克くある習ひ両虎相爭ふ時は一虎は滅び一虎は倒れる此仲滿と勘左工門の爭ひから此所ゐ一ッ門前に大騒動を惹起し升る抑も此の千草と云ふ者は何人であるか信義長者が家の騒動に濫觴て名高き俊德丸の傳記に押移る、鳥度一ト息いたして追々と……

第二席

何故仲滿と勘左工門が爭ふと申し升るに此仲滿と云ふ者は此

家にて忠臣無二の人で御坐います抑も是れへ乘物にて參りましたは千草と申して只今では住吉の富士と申する者の妻ど御坐いまして元此信義長者が方に居りまして既にゐの次郎を儲けました然るに元々妾同様な者で御坐いました故長者は此人に一時暇を出だし、由つて樂人富士と申す者に追はしましたので所が此度此万秋樂の舞を二人の子に教へるは何者が好からうと種々家來共と評義をいたしまして幸ひ富士殿を招くが宜しからうと存じまして此程は富士の妻ではあるが千草は既にゐの次郎樣のお腹であるに由つて是れ充分に緣があるに由つてお招きがお宜しいと取分け此勘左工門國廉と申する者がかゝ勸め申した理由で御坐います其故今日乘物にて參りました然るに門前が惣門を披いて是れより入らんといたしましたるが誰あつて是れを咎める者は無いが仲滿が乘物を止めました此

時勘左工門　勘仲滿どの何故御身はお止めに成つた　仲「是れはしたり國廉殿平生明けざる正門を開いて乘打とは甚だ以て其意を得ず貴殿が尾て居ながら不行届きでは御座らんか　勘「此りやア怪からんことを仰せある此千草樣を貴殿は何んと思し召さるか當家の御二男乙野次郎樣のお腹樣では無いか其故開門に及んで御出迎ひ申上げたのだ臣の身としてお手前御存じ無いか　仲「默らつしやい勘左衛門どの成程仲せの通り乙野次郎樣の母君と雖も只今でば他所へかしづかれ亦嘗へ母君にもせよ御本妻に非ず主人の愛妾では御座らんか夫れに正門より乘打にて這入るとは甚だ以て不埒の御事で御座る夫たで拙者が止めたのだ。此時勘左衛門は　勘「左樣か、然らば万一主人より此不都合を責められたなれば貴殿は何如なさる　仲「ヲヽ主人より咎めのあつたる時は斯く申する仲滿速かに腹掻切つて

も申譯をする御家の御法を亂さぬ覺悟で御座る如何なる來客ありとも滅多に開かぬ作法を知つて居りながら婦人位いの其爲に正門を開いて乘打させる貴殿の御心ろ甚だ以て其意を得ず万一御咎めあらば拙者腹掻切つて申譯をいたさう此時住吉の樂人富士の内室千草と申する婦人乘物の内より出でまして　千草「アイヤ御兩人暫く爭ひを止まり玉ひ妾が狼狽て乘打せんといたしたのは誤りなり是れなる仲滿の申される通り乙の次郎の母とは云へども今は他へ嫁けば他人なり許して賜はれと事柔らかに申したのは其所は婦人其儘互ひに跡へ退がり勘左衛門に此時ヲロリと仲滿を白眼んだ仲滿ハ只正直一偏別に是れを後の遺恨にされるとは思ひません扨て夫れより千草は奥に入りました所へ後德丸どの續いて乙の次郎も夫れへ參りました能う參られたりと會釋いたす由つて千草も一應の挨

接、願て長者にも御目通りをいたした　長「扨て千草殿此度鎌倉に於て執權高時樣賴朝公の御靈尼公御追善の爲に日本に誰あつて一人も極めたる事の無さ万秋樂の舞に付き常々我子二人が舞に心を入れ奥義を極めたる事が速くも鎌倉へ知れ此度の御沙汰に就て鎌倉へ參り万秋樂の舞をいたせとの仰せ家の譽れ身の面目なれど未だ舞は種々學ぶと雖も万秋樂の舞を修めづ夫れに就ては樂人富士の許に願はんが爲に一時御身の許へ知らせしなり、早々立歸り富士に此事を告げ呉れば此上も無き悦びかなと柔らかに信義長者の申されたる一言　千草「委細承知いたしましたと其日は其儘立歸りまして翌々日樂人の富士は住吉長者の家に參る事に成りました却説重復申上げるやうですが尼將軍の御吊ひに御法事の樂を勤められる御方は從四位の下に叙せられるとの御事

抑も此御法事に使う万秋樂と云ふ樂は樂人多しと雖も是れを傳へし人は住吉の富士ならでは無き故に此度兄弟の御指南に御賴みゐ相成つたので御座いませう爰に住吉の富士と申す樂人長者が屋敷へ參りました尤も相變らづ樂物にて中々其儀式は大したゐとで恰好長者が屋敷門前まで參りました時に夫れへ一人來つた者が御座いまして　男「アイヤ其樂物暫く待つて下され。と呼わりました事故に其聲に富士は樂物の内からヒヨイと見れば遲は如何に己れが一子三代松左京之進と申す者で御座いまず是れは富士の先妻の子で至つて愛して居りました者ですが不圖した所から遊里へ通ひまして其頃をい迎ぶ者無き梅ヶ枝と云ふ全盛の太夫夫れに到して心を入れ仕舞には親の金を持出だしまして其梅ヶ枝を身受なし互ひに深くなる交情はおか〳〵以て一方ならづ遂には父の家にも居られづ那方

此方と飛んで歩いては所謂懇意先きに不義理をして歩いて居り升から背に腹は替へられぬと可愛い子ではあり升が、勘當して仕舞ひましたなれば此左京之進一時梅ケ枝を連れて便る所も無く只今で云ふ安宿のやうな所へ泊つて追々世間を狹くいたして自分ながら　左京「アヽ」歎かはしい事であるつと世を憂きゝとに思つて居る處へ此度父富士は万秋樂の舞に就て是れを信義長者が悴共に傳授なすと云ふ事を聞て實は左京之進も態きました是れは一子相傳の者なれば中々以て他に讓るべき所の者に非ず夫れが爲に己れが其事を聞て今日富士の屋敷へ勘當の身ではあり升るが參り升と豈測らんやモー長者の許へ參つたとの事是れを聞て跡追馳けて來て只今此所で聲を掛けたので御座います駕籠の内より除かして見たが喫驚いたしまして夫れには供の者も許多居りましたから片蔭へ呼んで富士

が　富士「此りや〳〵汝は何故此所へ參りしぞ最早其方は忘れはいたすまいが勘當いたした身の上其方は子で無い私は父で無い其方の其姿を見ヨ其樣子情け無き姿をいたして今日は其方は此身に耻辱を掾せる積りで是れへ參りしか　左京「滅に父上私は勘當をされて居り升る身の上今日御目に掛れたる義理では御座いませんが是れよは少しく仔細のあるゝと云ふのは此度長者の子達に我家の秘曲万秋樂の舞を御傳授ある由、私長子に生れて此の家の秘曲を他の人に讓られては世にあつて存命甲斐無し尤も御父上は御承知で御座いませうが其故私は是れへ參りました、サ切望今日の所は御止まりあるやうに……私も彼の妻梅ケ枝と申しては恐れ入るが不圖した緣より父上に御苦勞を掛けましたが是れよりは心を改め充分樂人の家を次ぎ父の秘曲を充分に受次ぎ必ず此左京が充分に心を籠め世

間に私の今迄の不埒を謝したる所を見せ、父上に孝をなし又二ッにはなさぬ中とは云へども母に孝をおし立派に父の家を立てる精神であり升から何卒父上ヨ此万秋樂の秘曲は長者が御許へ御譲りの儀は暫時御見合せを願ひたい又強てお許しに成るとあれば私に御傳授下されたく然らば此左京之進より長者の子息に傳授いたしませう只今親で無い、子で無いと仰せられましたが斯く心を翻したる上は何卒右の万秋樂一子相傳の秘曲私に御傳授下さるやう偏に願ひ奉る。と大音を揚げて夫れに平伏し涙と共に頼み入れました此の時富士も共に涙を飜し

富士「コレ左京之進其方は遊女に迷ひ放埒をいたして勘當は爲れども今日心を改めて我家を一心に嗣ぎたいとあれば予も老後の樂み此上も無い事、万々父を欺くのではあるまいな　左京「イヱ何う仕りまして只今までなら兎も角も今日心をしめたと

申した以上父上に偽りでとを申上げて済みませう決して偽りでは御坐いません……

富士「ウム……左様か、成程一に相傳の舞樂万秋樂、汝が是れを學ばづして他人が秘曲を知ると云ふは理と爲てあるまじきあと、なれど一旦傳授いたすと申した以上は某しも今更止めると云ふ次第にも參らん然らば斯樣いたせと忰の耳元に口を寄せまして何やら囁いて居りました左然らば御父上……

富士「必ズ粗骨をいたすなよ。此千草と申せ婦人は弦妻でありまして兎角左京之進と中が惡う御坐い升尤も左京之進ばかり惡いのでは無いので千草の方が重に惡い左京之進は邪魔であり升から出て行けがしゐたす去れば自然と歡樂をもいたすやうな次第、由つて富士も子が可愛いには逆ひありませんが重向き可愛がつては家が穏かに參りませんから十に七ッ迄は左京之進の方を叱るなれども燒野の雉子夜

るの鶴子故に迷ふ親心、蔭では斯の如くかばつて居り升、是れ親子の情で今以て世間に斯ふいふ家の不取締りの事は往々ある習ひで御坐い升此時富士は悴に向つて申したのは如何の事であると申すと成程万秋樂の舞は一子相傳の秘曲なか〳〵是れを他人に傳授すべきものでは御坐いませんから斯く成つた以上は詮方が無いから止す譯にも不可んに由つて其方長者の屋敷へ忍び入り俊德丸、乙の次郎に此舞を敎へる所を隙見いたして壁へヨかしと云ふのが是れ富士が生涯の誤り何かの事は親子の囁きでと早々に富士は門の内に入る此時長者が家來共夫れに出迎ひまして、是れへ〳〵と案内をいたす富士は案内に連れまして一間へ通る内に長者も參り賊に以て今日は長者の家に賊つて居ります此時に長者は富士に向つて　信義「扨て私も此度二人の悴が鎌倉へ御所望に相成るに就ては御身充分二

人の悴に万秋樂の舞を御讓り下されヨ　富士「委細承知いたした此時傍に居た千草が　千草「如何に長者樣の御言葉には候得共併し此舞ばかりは俊德殿か乙の次郎か二人の舞振りに由つて何れか一人にお讓りを以て富士の家の秘傳で御座るとて女だてらに出過ぎた一言次に扣へて是れを聞て居た忠臣仲滿はロりと千草の顏を白眼みました凡て此仲滿と千草積いては合役勘左衛門互ひに心の合はんが爲に却つて家の騒動に成り升扨て忽ちふして其席を儲けましたるから尤も金子に不自由の無い長者　長者「どうぞ是れへ〳〵と案内をいたす廳て富士は夫れへ參りまして二人の子供に他の舞をさせて見るとイヤなか〳〵乙の次郎の其舞振りと云ひ實に感心おもので箭柱は二葉にして芳ばしとやら此子後には大した樂人に成れる然るに兄の俊德丸此兄の方は何うも舞う手の工合或は又掛聲の工合

何にと無く弟乙の次郎に劣つて居り升左右に居流れて見物いたして居りました家來共に至る迄　甲「何うも乙の次郎樣の方が面白し。」とあてつ一人二人三人と云ひ囃して居り升る、夫れに就て拙左衛門は心中大きに悅んだが、勘左衛門に反對して仲滿の歎きは如何ばかり、是れは能くある習ひで、兄弟他人の始まり抔と申し升が、既に德川三代將軍家光公、御幼名竹千代樣、夫れに駿河大納言の國松樣、其の御兩子の御守役同士が爭ひまして本多上野之助、平岩主計守、此方は土井大炊頭、酒井讃岐守抔と双方御守役同士が自然と競爭をいたし升、夫れは夫れ、是れも又如何に仲滿と云ふ人が只正直一方、夫れに引替て勘左工門國廣はなか〳〵世才もあるし、尤も奸曲の奴で御坐います、何かチヨコ〳〵いたして主人の氣に入るやうにいたしまして、何うしても勘左工門の方が受けが克く成つて居りました、勘左工門は進み出で

丶

勘「只今御兩君の御舞を拜見いたしました、主人に非を打つは此上も無き不忠なから然し是なるを是とし、非を非とするが臣の役目、由つて恐れ多き事なから只今の御舞振失禮なから御弟子乙の次郎樣の方遙かにお宜しく御兄君俊德樣の方劣れる由つて是れは万秋樂の舞は乙の次郎樣へ御傳授あつて鎌倉へ下し、高時樣の御前にて充分なる御舞振りを御覽に入れ、御當家の面目を施す方然るべく兄君俊德丸樣は何か外の御舞を以て鎌倉へ御下しあつて然るべく〳〵と存じ候仔〳〵此儀如何に候や。」と云ふのは千草方と心を合せ、乙の次郎を出精爲して己れ等が榮曜榮華を貪らんとする下心でありまして、勘左工門の言葉を聞き誰あつて斯ふと發言する者も無し、此時富士の樂人進み出で

富士「ヤヨ勘左工門どのお默り召され、御身は御家老の職なれば何事に由らず、御指揮あるは是れ當然の事なから樂の事に至つ

ては、某し師と爲て是れに與る、必ず御指圖御無用、成行衛身只今仰せの如く舞振りは遙かに乙の次郎樣の方勝れりと雖も、此万秋樂の舞は御長子の俊德丸殿に御傳授申すが物の道理、富士家の秘曲万秋樂は俊德樂より外に許すべき人は無し、武士道の貴郎が舞樂の事に御嘲を入れるは御無用かと存じ升。と一本突込まれました、口には云はれと一同の人達も　一同「マ、ー好い氣味だ。と互ひに目と目を見合すは是れ以心傳心、千草は是れを聞まして　千草「ナン富士殿……貴郎はマア何を仰せられ升る、只今勘左衛門どの、仰せの如く万秋樂の舞は御兄弟何れか御勝りになつた方へ御傳授申すが當然……　富士「ア、此りやく千草默らつしやい、和女は樂人の妻と雖も其極意のことは知らない　千草「夫れでも俊德樂の御方は舞の御手振りも何んと無く不器用であらせられる、乙の次郎樂は……。と云ふのは何所迄

も己れが眼を痛めた乙の次郎に秘曲を傳授させんと爲る、此時富士は少しく面を替へまして　富士「默れ千草、女だてらに出過ぎる處で無い……イヤ御主人始め御家來の方々ヨ、餘の舞は兎も角も万秋樂ばかりは俊德樂へ御許し申すより外に無く。師匠の一言默し難く　一同「ハッ……。と云ふ此時勘左衛門は千草の顏を見る千草は勘左衛門の顏を見ると云ふ長者は　信「實に道理である譬へ不器用にもせよ兄が受次ぐが當然……。と云ふ富士「然らばイザ俊德殿に御傳授申さん　信藤「何れに於て御傳授下さるか　富士「イヤ暫く休息なし、其舞と云ふは今宵四ッを過ぎ、四ッと九ッの間だに於て讓るものである、左のみ六ケ敷き事に非ず、只其妙手々々と云ふ所を讓づるのみ、武勇の所謂極意皆傳と同じ、ゑと、手を持つて敎へづとも口傳にて宜しく今宵無相違く御傳授申すから一先づ皆々御退がり遊れ、又父君長者に

も暫時此所をお退がり下されヨ……サヽ急られヨ俊德丸　俊」委細承知いたしました。とあつて俊德は聽て其舞を學ばんが爲に富士の樂人に從つて今迄居たる鄙臺を少し離れて一ト間の內、此所に又一ッの舞臺が御座いまして是れお上がりました、此時乙の次郎も願わくは其樣子を見たしと共に夫れ迄參りましたが俊德が止めまして　乙」是れは御兄君樣貴郎が御受次を遊ばす秘曲を私共に……

俊」イヤ〳〵御身は那方へ御退がりあれ、御師匠樣の云はれる通り他の者に見すべき曲に非づ、お退がりあれ、お退がりあれと兄の一言に乙の次郎も致し方無く次へ退がる、兩人は一間の內へ這入つて如何なる曲を舞つて居り升か固より知るに由ありませんが只エーイ……ヤ……ア……トーン。と云ふ其足拍子の音のみ、遙りは深々寂

莫といたして居り升、折しも向ふの樣俗にてパタリ〳〵と云ふ足音、是れ何人であるか更に分りませんが足音のせぬやうにお庭から樣へ上がりまして今富士の頻りに秘曲を敎へて居る一間の外へ立上がり唐紙から內の樣子を外目も觸らづ覗いて居つたのは看客最早御推了の事でありませう、必ず左京之進に相違無いと思召すでせう、然り如何にも御推察の如く左京之進で御座い升、先刻父富士の言葉に今更傳授を斷はる理由にも行かんに由つて其方は長者の壓敗へ忍び入り、俊德丸に敎ゆる所を隙見して覺へヨかしと情けの言葉、固より樂人の家に生れ、他人より覺へは好し、又家に居つて世に無き此富士の編出だしたる鄙の手も皆心得て居り升から自ら手足を動かさづとも一ト目見れば覺へられ升から富士も忍んで來て隙見をして覺へヨと云ひ、左京も覺へる積りで忍んで來た、然富士が左京之進に

忍んで來ヨと情けの深く許したのが是れ富士の失策、とは神ならぬ身の樂人富士、一心不亂に俊德丸に万秋樂の舞を敎へて居ながらも心の裡では我子の左京が聞覺へしかと押返し〳〵再三敎へる心遣ひ、左京も同じ心にて是れを覺へづば我恥辱と息も嗣がづ樣子を見て居り升、身は外にありと雖も心は父の傍に往つて居り升、其中段々と氣合の調子、足拍子等も充分に眼へ這入り本望を達せしと魂しい定こる左京之進、不圖邊りを見れば這は如何に己れの身から二間ばかり離れた所に是れ又一人の男が中の樣子を窺つて居りました、左京之進とハッ……お顏を見合せる、左京は眦を潰し、之々自分も是れへ忍び來つた身の上、父からは許されて居るとは云へ長者の家で許さぬ身、所謂日陰者ですから　左原ハッ……。と思ふ然るに彼の人も左京之進の顏を見ると眦を潰し樣より飛降り、飛鳥の如く身を變して塀を越へて逃出だしました、左京之進は　左京「怪しき曲者待てッと聲を立てんといたしましたが　左京「イヤ待て暫時、此身が怪しき者ならねば取て押へる奴なれど我れも密かに忍んで來て居るのだ人を押へんとして此身が詮されては一大事、然ふじやと氣に掛りながら其儀も成らぬ發見られては不首尾ぞと同じく庭へ飛下り、櫻の木の枝へ手を掛けて向ふの塀を乘越へんといたしましたが左京之進の運の盡きる捕まつた櫻の枝がポッきと折れて其身は擅と大地へ落ちました　左京「エヽ失策つた……モー一遍工風して乘越へんとは存じましたがモハヤ夜も更けて居りまして木の葉一枚落しても邊りに響く位い、左京「其内夜明けに間もあるまじ、今少々の間詮方無し、寧そ此塀を乘越んには手術の枝が折れて仕舞ひ、何うする事も出來ないから樣の下に忍んで居て夜を明かし、明るく成つてから、悠

然逃げ出だした方が怪しまれなくつて却つて宜しい、庭の内では定めし是れだけの長者の家、夜廻りの者も充分に居らうから發見られては却つて面倒である、此りやア其方が得策だ。と腰を撫で〳〵樣の下へ這込んで一時息を殺して居りました、情けなきかな、此頃をひ日本に一と云つて二と退がらぬ樂人の富士が、悖に生れあがら今は日影の身と成つて、假寢にもセヨ人の樣の下でいたすとは全く遊女梅ヶ枝が艶香に迷つて斯くの仕合せ若き内は血氣未だ定まらぬ、是れを戒むる色にあり、誰んでも愼むべきは色情の道であります、左京之進は吾れと我身を顧みて其情けなきを歎息いたし、行末趣方と考へて居る内に、睡むるとも無くトロ〳〵とまどろんだかと思ふと彼かに人の聲騒がしく　甲「アレ……皆樣お出逢ひ下さい、樂人富士殿を怪しき曲者が切殺しました、アレ那處へ逃げて……お出逢ひ下さい、皆樣……

……。と耳根に響く女の聲、ハッと目覺めた左京之進　左京「ナニ樂人富士殿を切殺して逃げて行く……ナニ父上を……此りや大變……。と其身を忘れて樂の下から踊り出でましたがモー其時は夜はホノ〳〵と明け渡り庭には那方に一人、此方に一人、立つて何れに逃げたと騒いで居る所へ左京之進が降て湧たやうに樂の下から飛出したのであり升から　一同「ソレ曲者が其所へ出た取て押へろ、ワッと云つて大勢の人が四方を押取卷て遂々打倒してギリ〳〵に縄を掛けて仕舞ひました、何んの事は無い油を浴びて火の中へ飛込んだやうなもので左京之進は大きに驚きまして　左京「アイヤ拙者は決して怪しき者では御座いません今樂人富士殿を切殺して逃げた者が有ると云ふ聲聞て踊り出でました者、決て〳〵怪しき者では御座らぬ……。手塚勘左衛門は是れを聞き　勘「ヤー扣へよ〳〵　汝此場を言紛らせんとい

たすが平生見たる事おき者、時ならぬ時分に締り厳しき此屋敷の内にあるゐと第一の證據なりサ白狀いたせ。左京之進は斯く云はれて見れば一言の申譯も御座いません、折しも千草が其所へ馳付けて參り　千草「若様御待ち下され、夫れあるは妾が良人樂人宮士の一子左京之進と申す者、ヲー……扨ては左京と和郎は身持放埒にて家を追出され、勘當の身と成り、今日宮士殿が長者様の御子息達に一子相傳の秘曲を教ゆるを遺恨に心得て己れが親を手に掛けしかアナ憎くき奴かな。と曰尻キリ〳〵と釣上げて眼みましたる其時に左京は面を擡げ　左京「イエ〳〵私は何んで父を殺しませう、　千草「左様なれば父か敵さぬ者が何んで厳重に締りある長者が屋敷に今時分……　左京「サア夫れは……　千草「サア千草「サア……。と詰掛けられて進退爰に谷まりましたが實は親人宮士殿が今宵忍んで屋

敷へ入り鄰の様子を窺見せヨと云ひましたと打明けて話しも成らず如何はせんと差俯向き涙に暮れて居りましたが抑も宮士を殺した者は何者か又左京之進は繼母千草の爲に如何ある事に成り行き升かチョイト一息吐て次回に述べませう……

第三席

物の間違う時はいたし方の無いもので宮士とても我子は極意を讓りたくゝ思ひ升が繼母の前もあり、繼母と申すのは前回述べたる千草で御座い升、誰にも折明けず左京之進を忍ばしたのは宮士の誤り、又宮士を手に掛けたは何者なるか、却説も長者の屋敷は上を下への大騒動、其内夜は全く明け放れまして、情け用捨もあらくれ男子勘左衛門の命に由つて三代松左京之進をギリ〳〵と縛り上げまして繼母千草が様側にて今吟味をいたし居りまする、　千草「コレ左京之進、何う爲ても父を殺した覺へは

無いと申すか今迄其方の品行が正しかつたなれば兎も角も、抑も、妾が富士殿方へ嫁入りせし時分から傾城狂ひに掛つて親の金子を盗み出だし、種々様々の不行跡、世間の手前は繼母の千草が吾れを追出ださんと測る抔と様々に母の悪口殊には父富士殿の悪口をいたし、親を親と思はぬ不孝者、父を殺す位いの事は恐かの事、其方が殺したに相違あるまい、アナ親殺しの大罪人……如何に方々只今妾が申す通り平生の行ひより見るも富士を殺したは此左京之進に相違是れ無く必ず彼が辯舌に迷はせ玉ふ事勿れ。と大音に云ふ、傍に居る人々も只呆れ返つて左京の顔を打眺めて居りましたが、此時勘左衛門は聲を荒らげ　勘「千草殿モー斯く成る以上は、此左京と云へる奴、親殺しの大罪人、早々官に訴へて逆磔刑の處刑に行なはん、方々此者を引立つて上へ訴へる御用意あれ。始終の樣子を最前から聞居りました仲滿が

仲「勘左衛門どの暫く……　勘「エ、亦しても仲滿どの兎角に拙者のいたす事を何んぞと云ふと止まれ〳〵と仰せあるが何事で御座る　仲「去れば今一應お詮しなさい、生は難く死は安し、刑に就たる其後に眞實の罪人出でたれば何んとおさる、如何に大惡人と雖も我親を殺すと云ふ其主意を一通り相糺ね、よし殺したるにもせヨ此度家の秘曲をば他人に讓るを殘念に心得た位いで親を殺せし次第には非ず、充分に取詮した上ならでは官に訴へるは暫時御見合せあれ　勘「お默り召され、仲滿殿、官に訴へづして此長者が屋敷の内で調べなば只温順柔和の調べにて强情を張つて居られる時は何年經過とも埒明かぬ、然る時は官へ訴へ拷問等に掛くる時は容易に白狀するは必然、手數を省いて速かに服罪さするの良策なり、サ速かに物共左京を官へ引立てヨ。此時一室の内にて信藝、両人待て其三保松左京之進とやら

の時信義が一應相談ねる何は兎も あれ富士殿の死骸は早々手當てをいたされヨ。靜々と出來つたる信義は品格は宜しく見ぬ昔しの源氏の君かと思ふ斗り、樣側近く座を占めて　倉「コリや左京之進どの面を揚げられヨ。物柔らかく云はれ　左京「ハッ。と斗りに頭を上げる　信義「今御身は親を殺さんとの言譯じやが然らば何んで此屋敷へ忍び入りしぞ　左京「斯は信義殿にて候ふか、父の誤りと成るべき事故死しても云ふまいとは存じました　が御情け深き當家の御主人、事の仔細を申上げますから一通り御聞き下し置かれ升やう、私ど富士の一子ゆいたして名は左京之進、先つる頃より若氣の至り、遊里に通ひ、明暮れ放埒の其爲に遂々勘當の身と相成りました、由つて妻を連れ那方此方と漂泊ひ居る内、此度万秋樂の秘曲を以て鎌倉執權職の御家にて賴朝公御臺尼公の百回期御追善に就て父が貴郎の御子御両人に父

が富士家の秘曲万秋樂を讓るとの事、是れも亦致し方なし、左は去りながら万秋樂は一子相傳の事、他に譲るは長者樣の御子二人、其他には父が前ず氣支ひも無し、夫れに就ては此度改心をいたして富士の家を受嗣ぎたく思ふ所から、左京が父に縋つて賴み入れたる時に父富士が云々斯く〳〵、兎に角濟まん事だが長者が屈敷へ忍び込み隙見いたせヨ、足拍子、手拍子は一ト目見れば其心得のある者故分るぞヨ、と有難き父の仰せ、濟まぬ事とは知りながら昨夜長者が屋敷へ忍び込みましたのは重々の不埒、首尾克く御館に忍び入り父が俊德丸に御指南の舞振りを見て居る中に、共に一人障子の外へ立て聞て居り升者がありました、私は御當家の御家來かと大きに驚き、逃げんといたすと私より先きに其者が逸足いだして逃去りました、怪訝の事があるものヨと思つて御家の方々に御告げ申す事も成らぬ其中に最早

御稽古も相済み、私も立帰らんと木の枝に手を掛けて塀を乗越さんといたせしにアラ情けなや、便りに思ふ櫻の枝、ポッキと落ちて大地へドーと落ちたる左京が身体、取付く枝も外に無ければ無拠く御様の下にて夜の明けるのを相待つて居る中に父富士の殺されたりと云ふ事を聞き、吾れを忘れて是れへ出で、御家恋逢に見咎められて此有様、サ斯の如き次第であり升れば決して私は父を殺すべき道理も無く唯くば、長者さま我父の死骸に遇はして玉はれ、切望御慈悲で御座い升ッ……。とばかりに泣き逆子として殺を殺す譯はあるまいが……然し許し遣はしたくは候へど御身が殺さぬとあるからは城の下手人があるに違ひ無い是れより充分に手を廻し、曲者を探し出だす迄御身を留置き候間左様御心得なさい　左京「夫れは固より覚悟の前、親殺し

で無いと云ふ事が御分りに成れば夫れにて暇へ身は牢舎の苦しみに相成らうとも是れは決して苦しう御座らん　信義「コレ仲満、左京殿の縄を解き、其方大切に守護いたせヨ。勘左衛門國廉が勘「イヤ〳〵其左京と云へる者は拙者が堅く御預り申さん、なかもつて油断ばならじ、餘り御主人御仁愛が過ぎる、兎に角某し御預り申上げる。と言張りました、重役の云ふ言語、夫れでも成らんとも云へませんから途々安で左京之進は勘左衛門が預る事に成りまして仲満は　仲「アヽー失策つた彼れの手にあれば遁かれ逃かれ命は無い、不愍なのは左京之進……。と心の中で歎じて居る、是れ仲満の情け深い所であり升、是れにて兎に角も富士の死骸を取片付け、早々に官にも訴へ出で、富士を殺したのは誰であらうと段々に探るあとに成りましたが只今の所では更に手掛りとても御坐いません、ヱヽ、樂人富士も世に稀れなる秘

曲を知る故に却て命を失ひ、剩まへ一子左京之進も時節悪るく人の家に忍び入り、當ちなれば家宅没入罪で罰せられても詮方が無い、然し其頭の事であり升から手塚勘左衛門に預けの身の上、只左京も己れの過命を歎息して居りました、是れより長者も何うぞないたして敵を打つて遣りたいと四方八方へ手を分けて金子を使つて探せども更に眞敵の犯人は手掛りだも御坐いません、由つて眞の罪人が出ない以上は左京之進が親殺しに相違無いと、誠に氣の毒なる事ではあり升が幾々三代松左衛之進は斬罪に行なはれました、誠に運の尽きゐそ是非の無い所で御坐います、偖て樂人富士の後家千草は良人が非常の最後を歎きもせず、たゞ〳〵自分が產んで信義方に殘し置た乙の次郎が私曲を傳授されざる内に富士が空しく相成りましたに由つて無て吃みし胸算用がガラッと外れて落膽はいたしましたが此上は何うしても何か外の手段を用ひても俊德丸を追出して乙の次郎に長者の家を襲がせるやういたさんと己れが悪事の相談相手手塚勘左衛門を招きまして　千草「姿は是れ〳〵思ふが如何の事が宜しからう。」と勘左衛門に組み入れました時に莞爾と笑つて勘左衛門「イヤ〳〵決して御心配あるな、富士殿を殺せし者も何れか是れに出でるであらう。」と云ふのは元來勘左衛門と云ふものは先づ此講談の内の、大悪人、此上も無き奴、千變万化に心を碎き此奴、一人の爲に未に至つては俊德丸が親難辛苦をする抑も昔しより二人の子を以て其が至に家督相續の爭ひは上下押並べてあり升るもの、爰に信義長者は俊德丸、續いて乙の次郎何れも負けず劣らぬ發明者、夫が爲に却つて家の騒動を醸します、茲に一旦他家へ嫁きました千草と云ふ者、樂人富士の家と長者の家とは大きな相違で御座い升から過日富士が殺され

て、己れが一人身を幸ひに再び長者の家へ這入り込み、乙の次郎を家督として長者をくろめ己れが榮華を貪ぼらんと云ふ氣が起りました、去れば其相續相手とするのは勘左衛門より外に無く、去れば勘左衛門に　千草「如何いたしたものであらう。」と種々に相談を掛けました、其時勘左衛門は再び小聲に成りまして

勘「然らば斯樣々々遊ばせ、燒木杭に火が付き易い」と言ふ譬へのを通り貴女は仔細あつて樂人富士殿の方へお出でに成りました、未だ御主人公は貴女に御未練が殘ッて居る樣子、是れよりは幸ひ賜かの稽古と云つて二六時中當家へお出入りなされ、時としては心有氣の容体を寄せ、何んと無く色を含める御言葉を御掛けあされば主人の惡口を申すのでは御座いませんが至つてお心好しの信義殿、自然と貴女に心が移りませうから其上の手術は斯ふ〳〵……。と奸婦、奸臣の二人が相談をいたしました、是れ

は演者は知りません、勘左衛門猶も言葉を次ぎまして　勘「然ふなる上は俊德丸を廢嫡して固より御利口なる乙の次郎樣、貴女がお腹を痛めた御子故、御家督に成れば此上も無き御悦び、夫れに就ては此度又鎌倉殿より命ぜられて尼御臺樣の五百年回（前回百回期とあるは五百回期の誤り）其折万秋樂の御御は次郎丸樣を差出だして充分の恩賞に預からば此上も無き悦びでは御座いませんか　千草「イヤ夫れは勘左衛門成らんぞヨ、此上とも邪魔に成るのは彼の伸滿、彼が居る時は何かに付いて吾等の妨げ何んの彼んのと長者殿へ對して忠義立て、殊に彼は俊德丸の御守役故惣領の肩を持つのは此り〻必定、何うがないたして役の伸滿を信義殿の不興を受けるやう、伸滿さへ無ければ妾其の出精は思ふ儘である、勘左衛門此上とも伸滿を失ふ手術を弱へて呉りやれ　勘「仰せにや及ぶべき、夫等の儀に付き決して御

心配御無用……。と好からぬ事の相談をいたして居る、折しもあれ玄關にて　女「御免あれ……御免あれ。との聲、取次の者も御座いません故ッカ〳〵と立つて勘左衛門は　勘「誰方で御座る。と二三度呼ぶ時最と雅しき聲にて　女「妾にて候ふなり、今是れに母君在すと承はり參りました、妾は梅ヶ枝と申す者でおります。梅ヶ枝と聞くより兩人は顔見合せ、千草は退ゝしく立つて奥に入らんといたしました、摸裙を捕へた勘左衛門が何にか耳に口を寄せて囁いて居りましたが此梅ヶ枝と云ふ者は前回官上いたした如く千森の廊で其名を揚げし花魁にて、數ある遊女の其中にも松の位いの太夫職、花よい鳴かぬ鶯の、月星日には逢うまいと思ふ男に別れてしまい、跡に殘りて獨り寢の情け無きを泣て明かせし梅ヶ枝は、良人の左京は過ぎつる頃、父に見へて勘氣を許され、秘密の樂を覺へんと信義方の屋敷に入り込み王ひ

てより今日で十日に餘る故、歸られざるは仔細ぞあらんと、段々人もて探りますれば、思はぬ災難に逢うて勘左衛門の館に召捕られて居る由、聞くより心も心ならづ、涙片手に國廉が宿所へ、只今遣つて來たのであります。　梅「妾は三保松左京之進の女房で梅ヶ枝と申する者、此方樣に富士樣の奥方樣がお出での由、何卒母上に御目通りを願ひたう存じまする。　勘「チー〳〵兎に角是れに參られ口。此折邊りを見廻しまして千草は　千草「ヲヽ嫁女であつたか、梅ヶ枝であつたか、克う尋ねて參られた。目縁を赤く泣腫らして傍へ寄り、定めし良人は勘當の身に成つて居る、其富士殿の奥方故、此梅ヶ枝が參つたから嘸や悔い奴と思召し御對面は叶うまいと思ひ居りました所意外にも千草は梅ヶ枝の手を取つて奥に伴ひ呉れました、から、餘りの嬉しさに梅ヶ枝は涙に暮れて共に奥に這入りました折しも人は一人も居づ、只勘左

衛門と千草の二人切り　千草「フヽ、其方は左京の妻梅ヶ枝であつたか、今日迄は線無くして御目に掛らんであつたが見に角妾の許れの妻、今日はマア克う尋ねて呉れました、自らは富士殿の後家千草と云ふ者、逢うは今が始めてなれど和女の爲には男女あり、切望見知つて呉れるやう。と巧言令色鮮仁、口と腹とは大きな相違であり升　千草「今日は定めし良人左京之進を尋ねぬつたのであらうな。と云はれて梅ヶ枝は皆まで云はづフッ……と斗りに泣出だす、側に聞居りました勘左衛門は　勘「モシ後室千草樣御歎きは御無用、歎くたつても詮無きゐと　千草「アレむ、おへけな勘左衛門、良人と我子が死んだのに夫れが歎かづに居られやうか　勘「御道理には御座い升が……モシ梅ヶ枝殿千草樣は御歎きの餘り、申される事が跡や先き、一應此勘左衛門が申上げん、梅ヶ枝殿氣を沈着けて聞かつしやれヨ、御身が良人左京之進

は親を殺したに相違無い、其理由は此度長者樣の御子俊德丸、續いて乙の次郎樣、此二人の御子息の万秋樂の御舞を御傳授申す然る所自然と御合弟次郎樣の方が御覺へ宜しく此御方が充分に舞を御覺へと思ふたる、所が御身も樂人の妻に成つて御心得の事ならんが此の万秋樂は一子相傳の秘曲にして他に讓らぬが富士のお家の法、然るに據ろ無き理由にて此度御二人に敎へるふとに成つたに就て御身の良人左京之進富士が實子でありながら身を持崩して放埒に勘當された其事はトンと忘れ已れが一子相傳の樂を覺へぬを殘念に思ひ、親を怨、且家の秘曲を他人に取られるを殘念と思ふ所より長者の屋敷に忍び入り、今や万秋樂の御稽古が相濟んで舞臺を降りた其時に、左京殿があらう事かあるまい事か實父富士殿に切付けて遂々殺して仕舞ひまし

したが主人が屋敷の騒動一方ならず、直樣取て押へましたが段

々調べたる所只今述べたる心に相違無く、サ左京が白狀をいたして自ら供書爪印の書類は斯の如く、由つて親殺しの大罪人、猶豫すべきに非ざれば一昨日の夕景、入合の鐘と共に首を打たれました聞くより梅ヶ枝は身を震はして　梅「エ、……万々と思ひし通り良人左京殿はモー首を打たれましたか斯罪に……アヽ一情け無いあどかな……。」と梅ヶ枝は遂りも憚からず大音揚げ歎へて居るはあとはりせめて道理なり　千草「ナー〳〵然し梅ヶ枝ロ今勘左衛門の話した通り左京之進が一時の心の迷ひから此期に迄歎きを掛け怨めしいは左京之進、然し和女も良人に別れて悲しいであらう、斯く云ふ妾とても其通り良人には別れ眼は痛めねど我子に別れ、何んたるあどの不運ぞや、佛法で云ふ因縁因果、寧うの事に一ト思ひ、自害でもして冥土へ行き、良人や我子と諸供に嬉しき遊のうてなに乘り、親子夫婦諸共に暮くし

ては思へども、其様な短慮をしては墓提を吊ふ人も無く却つて佛の不爲ぞと思へば死ぬにも死切れず、未練らしいが死を止まり、良人と我子の回向の爲斯く存命へては居る者の便りに思ふ者も無く、天にも地にも只一人頼みに思ふは和女ぞや、此上は和女とて妾を親と思ふてたべ、妾も娘と思ひますぞへ、勘左衛門必ず笑ふて下さるな。と手に手を取つて絶入る斗りの歎きなり、其折勘左衛門は膝を進ませ　勘「就ては梅ヶ枝どの、未だ今日の所一時貴女を引取る理由に行かんから暫へ如何ある所へなりとも當分此場を御立ちのきなされ、夫れゐ就て富士殿が家の財寶、同じく愛東、左京が遺品の紙子、並びに親を打ちし時の白刃抔歎きを止めて此品々を持歸り、員や良人の墓提を吊ふが肝要ぞ、南無阿彌陀佛〳〵。と殊勝氣に云ふ邪智の心ぞ恐ろしい事であり升、梅ヶ枝は思はぬ二人が情け深きに嬉し涙ゐ暮れて遺品

の物を受取れば又も良人の事を思ひ出し、と斗りに泣出しました、知らぬ事とは云ひながら梅ヶ枝は彼等二人の舌頭上に欺かれ、扨ても〳〵氣の毒なるあとにて勘左衛門も空涙を流して居りました、此遺品の品々は賊の物ではあり升が左京之進が口書爪印と云ふものは勘左衛門が取拵へたものと見へ升、此時梅ヶ枝は顏を擡げ　梅「左様なれば母君様……勘左衛門様一通此塲は立去りなすが母君の仰せの通り此上は寧ろのあと、自害をして死ぬより外に無き事と覺悟はいたしましたが、只今の御深切の御言葉ゐ死を止まり、跡に殘つて良人の追善、又一ッには父上様、己れは佛体に成るより外に無し、左様なれば御両所様是れで御暇いたし升る。と立上がらんといたした時　勘「アイヤ梅ヶ枝暫く待たれ　……千草様邊りを御氣をお注けなされ前に殺つて國廉はッ〳〵と往つて四方の唐紙を明けて見て誰も居

らぬに安心なし、再び其所へ座を占めて　勘「時に梅ヶ枝斯く申すやうなもの、子として親を殺すと云ふは大逆人、世の中に澤山あるものでは無い實は富士殿を殺せしは左京では無いぞヨ

梅「ヤ、勘左衛門様とやら何と仰せられ升る、只今まで我良人左京殿と仰せありしに今に至つて他人とは……シテ其下手人は誰で御座い升、貴郎様御承知なれば早う其人を出して賜はれヨ　と以前に變つて梅ヶ枝が女ながらも一心に取つて逸した其様子、

千草「サ、夫れじや、左京之進が平生に身を放埒に持崩し、親に苦勞を掛けた故其れを幸ひとして惡者が已れが殺さして置きながら罪を左京に塗り付けたのであり升る。

梅「シテ其下手人と云ふ者が外ゐ御坐いませうか

勘「去ればあり確かに夫れとは定められねど十の内は九部まで迄其人に違ひ無いと云ふ事を見扳て慥たる勘左衛門……何んと千草様、今も今とて申上

びます通り手前から申せば昔しから云ふ兩虎爭ふ時は一方は滅び、一虎は倒れる習ひ、兎角に人の惡事を拵へ、己れ一人が出精をして榮曜榮華を貪らんと云ふは大家の臣には往々ある習ひ、勘左衛門も己れで是れを云ふ時は万一其類ひにはあらづやと思はれるのも辛いゐと故、牛は牛連れ、女は女同士、イヤ此りやア失禮ゐ言分でありますが貴女から梅ヶ枝に事れ樣子を明かし、女ながらも良人の敵と彼れを討てば是れに越した悦びは御坐いません、サ千草樣貴女から申渡して下され。と言詞巧みに申した故罰に道理なりと千草膝を叩いて感心おし　千草「何かの事は梅ヶ枝ヨ、此所では少し話し悟し最早今日も夕紛れ、今晩悠然物語りを申さん　梅「有難ふ存じ升、御深切なる母樣のお言葉、お れと良人を討たせた仇の奴、父上の讐の敵、何んと云ふ者でありて升が妾とて女ながらも敵は必ず討ちませう程よ速く名を打明

けてトされまし一心は岩をも貫くとやら、女とて敵の打てぬ事はあり升まい　千草「然ふ焦慮るのは道理じやがマア〳〵悠然話しを聞かれよ。と固より奸惡の兩人、計略を以て人を倒さんとする惡計ゆへ是れは容易に申し出しません、此時千草は梅ヶ枝の手を取つて奥に通入る、抑も勘左衛門千草の二人が誰を敵と申入れまするの看客試みに當て賜ひ……

第四席

此折千草は聲を顰め　千草「梅ヶ枝ヨ、其敵と云ふのは是れある勘左衛門の相役の仲滿と云ふ者ゐるぞ　梅「ナニ仲滿樣とは……千草「春藤民部尉、是れは抑も長者が家の家老とも申すべく勘左衛門より一歩進んだ御家來なり　梅「エヽ何んで其仲滿樣と彼仰るゐ方が……　千草「ソレ夫れじや、能う篤くり聞かつしやい、俊德丸は御愁傾、乙の次郎は吾が腹の子なりと雖も御次男、然る

に和女の良人左京の親富士殿が家の秘曲万秋樂を御二人の子に教へるを雖も俊德樣は愛へ惡るく夫れに舞の手振り、身体のみなし何んと無くギコチ無く賊の樂人に成れぬと見た我良人其故鎌倉へ下り万秋樂の舞を納め、家の譽れを世に擧ぐるは次郎丸より外に無しと富士殿が實は申上げ、御兩人に御傳授申すと雖も官にお出しなさるは次郎樣、俊德樣は御役に立ぬと、申しまする事を仲滿聞知りてか己れのお守申上げる俊德丸が出精が出て來ゴ、次郎丸が首尾克く勤め、官位を頂けば此御家は乙の次郎が御相續、俊德丸は兄の身で家督が出來ぬとは情け無い、尊うの申富士を殺して仕舞つたなら次郎丸もお覺へ無く此儘に成れば兄じやに由つて御家督は俊德丸であらう、去ずれは私共の身に變りも無く却つて出精をするであらう。と狹き了見の仲滿が考へにて富士殿を討つたのは夫れとは云はねど其樣子、充分

に解つたに由つて梅ヶ枝ヨ、其方が敵と尾覘ふべき人物は今云ふ春藤民部之尉、其時左京之進がお屋敷に忍び居つたのが悴の災難、夫れを捕へて責め折檻、火水の責めに逢つたのは皆仲滿が斗ひにて未だ當人が白狀もせざる内に親殺しの大罪と自分の一命を隱さんが爲に無理に左京の首討つたぞヨ、今仲滿は其威勢旭の燃るが如く闕あつて是れを仲滿と云ふ者も無く、嘸や左京が草葉の陰で怨みつらん、思へば〳〵仲滿い憎くき奴であると雖も妾とても仲滿と云へば己れの命が危く涙を忍んで今日が日まで我慢をして居つたぞへ、サ、梅ヶ枝其方が良人の敵は春藤民部、人間命まで捨てると覺悟まですれば己れに勝つたあとの出來るもの、女おがらも敵を討ち、天晴れ此世に名を殘せ、切望梅ヶ枝妾にも良人の仇、其方にも良人の敵、妾に代つて其方が敵を討つては呉れまいか、私が討つのは易けれど長者殿にも憚りあ

り、何う云ふものぞ梅ヶ枝ヨ……。勘左衛門言葉を合はして　勘

如何に梅ヶ枝ヨ、全く千草様の仰せの通りに違ひ無し、拙者が是れを手荒く云ふ時は世間の者は是れを知らづ、同役伸滿の威勢を誤み、亡きものにして己れが出精をせん巧みであらう抔云はれは殘念ゆへに決して言葉を出さねども千草様の云はれるのが全くなり、只梅ヶ枝御身が眞探の名を後に殘すは春藤民部を討つより外にあるまい。と申入れた、固より正直の梅ヶ枝ゆへ顏色朱の如くカッと怒り　梅克うろう御身知らして下された辱け無し、己れ存命て置うか……。と走り出でんとした時に勘左衛門は遽てゝ引留め　勘御待ちあれ梅ヶ枝、急がづは濡れまじものを旅人の踏より晴る野路の村雨、急て事を仕損ぜる勿れ、伸滿と云ふ者に大抵の者にあらず、万一遣り損なつた其時は御身命が あるまいぞヨ、謀計を以て殺すに如かず、其手術は斯う〳〵。と思

い事には拔目の無い勘左衛門梅ヶ枝に春藤民部を殺させ、己れの手へ住吉長者の家の櫃を一手に握らうと云ふ巧みを夫れと云はづに滔々と述べました、　千草然し怨みを晴すと雖も討つ道具無ければ叶はづ。と聽て千草は奥に入り、一ト腰を持つて來て　千草サ是れを以て良人の敵、父の敵を美ん事に討たれヨ。と渡し升れば梅ヶ枝は悅び押戴き　梅女でゝそあれ一度は大小帶挾む樂人の妻に成つた此梅ヶ枝、我念力を以て敵打の本懷を遂げ、其上は母上様や又勘左衛門様に對面いたさん。と勇々敢く も出で行きました、心の内こそ氣の毒なる事であり升る、爰にお話し別れまして唐の玄宗皇帝は未だ雪降る初春に北の咲かぬ　あと遲しとなし、御壺に登つて春をさし招げば餘寒放つて梢への花、蘭懷と開きたるとかや、又鶯燕と七律(笛)の妙を得て水無月に冬の調子を吹きて箱を降らせ、夏とは知らぬ白砂の雪の世界と

いたした事が有りまする、去れば人間一心なれば亦如何なる事も出來んと云ふ事は御坐いません、却説も俊德丸は幼少の折から容色人に勝れ、女にして見せ欲しき所の美少年であり升、由つて往來杯を歩きましても色氣の付た女子供　甲「アレ〳〵長者の御子息さん、後德丸殿が御通りぢさる、ホンゐ美くしい方ではありませんか。」と那方此方で云い合へる位い、俊德丸は藝道を一心に勉強して斯る事には心を寄せづ乙の次郎と諸共に學問舞樂の稽古に餘念もありませんでしたが此度の万秋樂の秘曲は樂人富士で無ければ外に敎ゆる者もありません、然るに其富士が殺されたのであり升から下世話で申す杖に離れた按摩の如く中々一遍位い敎へられたのでは覺へる事は出來ない、出來なけ、り、ア鎌倉へ出て仰せ付けられたる万秋樂、舞う事が出來ません、如何はいたさんと倡義長者始め客藤民部仲滿も種々に心を

碎いて居りました、忠義一圖の仲滿は段々と手に手を尽して此万秋樂の舞を敎ゆる者やあると段々尋ねました所北頭是れも有名の淺間と云へる人があり升、仁王寺の樂人で姓を秦と云ふ、仲滿は是れを聞たから直ぐ秦淺間の許へ參りまして段々頼み入れました故此時淺間の申すゐは　淺間「万秋樂の舞と云ふものは富士の家の一子相傳にして他に讓るべきものに非ず、然しながら某し仔細あつて是れを知ると雖も今日迄は決て人の前に舞ふたるゐとおし必ず人には秘して居りましたが此度の一條に就て一度富士に從つて御學びに成つたとあれば此淺間お手を以て御傳授申すと雖も表向きは富士より受けたと仰せあれ、御敎申すは實迷惑にば存ぜれども一度御受に成つた執權職の五百回期、万一其場ゐ至つて出來ぬとあつては御家の大事、委細承知いゐした。と引受けて呉れました故仲滿大きに悦んで

仲「夫れに就ては俊德丸樣、此お方は勿論おれども何卒御次男乙の次郎樣へも御指南下され候ふて御両人鎌倉へ下り共に學れを揚ぐるやういたして……。と願みました仲滿は同じ主人の子になれば己れが御守をするしふいには係はらぬ決して分け隔ていたしません、勘左衛門が己れの御守り申して居る乙の次郎を出精させ、己れが榮華を貪るに比しては雪と墨の程の違ひ、淺間も是れを承知いたしました、由つて淺間の稻古場は天王寺の境内で御座い升から此天王寺の樂堂へ日々淺間も出張して俊德丸乙の次郎丸も參り、万秋樂の稽古をして貰つて居り升る、前回にもチョッと申上げましたが北條時代から足利十三代は鎌倉が燒んに行なわれた世の中であるから甲「ソレ天王寺の樂堂で毎日稽古がある、御旺は樂人の名人淺間だ、お弟子は信義長者の御子息俊德丸樣に次郎丸樣だ、此奴ア一ッ見物だらう。と毎日

毎日其聲考を見に參る其人數は大した事で御座いました當類までも兎角音樂の音を聲ふて來る位いであり升

衆に同じ五幾内の内に、和泉の國大烏と云ふ處に陰山長者光利と云ふ人が御座い其家臣にて大烏頼母と云ふ文武に達せし男あり升、然るに主人光利の家には先祖影山中納言が天皇陛下から賜はりました處の御能に使用する面があり升、是れ影山家の重寶、其面は万秋樂に無ふて叶はぬ品であり升から此度俊德丸鎌倉の御御樂を勤められるに依つて暫く恩借ありたき旨使者を以て影山方へ頼み入れました、信義長者と陰山長者とい親戚の中で御座い升、其故長者も早速に承知しまして一日大烏頼母を召して　長者「汝太儀だが、此度俊德丸が鎌倉へ下ッて万秋樂を勤めると云ふ、如何にも以て上への御奉公、殊には一ッの學れにて天王寺の境内の御樂堂にて日々稽古をいたして居る由、汝太

頼母「委細承知いたしました。と早速に届けました、是れを見て仲滿は悦び〳〵仲滿「是れは〳〵遠路の所御苦勞に存じます、只今御稽古の御内暫時失れにて御扣へ下さいまし。と挨拶もソコ〳〵ゑ大鳥が持來つたる所の秘藏の面は桐の箱へ入れたる儘是れを受取り、彼方に持參りました、大鳥頼母は一應御對面をしなければ成らんと此方に相待つて居りました、樂堂の表に挾箱を置かせ、脇なる石に腰打掛け後に供を待たして、暫時待つ間の樂みにパクーリパクリと煙草を飲み、相待つて居り升る、スルと向ふの石に腰打掛けて邊りの景色を眺めて居たのは鎌倉管領、上杉の執權長崎新左衛門の家來大内玄蕃、如何なる次第で是れに扣へて居るかと云ふに主人今日天王寺に參詣なし、今參詣中、由つて主人れ歸るのを此所で待つて居るので御座います大鳥頼母聲を掛けまして

頼母「ヲ、貴殿には今日天王寺へ御參詣で御座るか……玄「イヤ誰方かと存せし、に大鳥ど、の、拙者は今日遊山では御座らん、主人が天王寺へ參詣に參り、夫れを待つて居るので御座る……頼母「ア、左樣か　玄「シテ貴殿は　頼母「拙者は當樂堂の俊德丸殿に用事あつて御稽古を仕舞うのを相待つて居りまする　玄「ア、左樣か先づ此方へ……。と互ひに一別以來の挨拶をいたしまして暫時待つの間に四方山の話しをせんと互ひに種々に、言詞を變し打寛へて物語りをいたして居りました、然るに此上杉と影山の間だに婚姻の儀がありますは是れば何んで御座いますと云へば影山光利長者に一人の娘がありまして乙姫と申升、至つて是れは美女であり升、此頃をひ先だ日本で此乙姫と云ふ者に並ぶ者は無い位い、世の人見ぬ懇に皆あゝがれて居り升る、是れを管領高景の許に貰て頂ひ受けるゝとに成つて居りました、彼

ね〳〵相談の事もあつて組收極つて居ります、然る所影山の方よりは上杉が暴威を逞ふして騒りを極めて居り升から人の非難を受けるのが嫌だに由つて成るべく暴を避けて同家一門の信義長者へ嫁がせしめたいと思つて居りました、此方は望まない縁談であり升か先方が餘りヤイ〳〵と云ふので止を得ず結納までは取替して近々に婚儀をすると云ふ、斯の如くの有様故自然と他人の家とは違う故に家内同士も親しく話しをして居りました、扨て今日も樂堂の下へは一人二人三人と俊德丸の舞樂を見て樂しまんと立つて見て居る者もありました其折一人の優男其所へ出て來りまして　甲「エヽ少々御尋ね申したう御座います。云はれた折玄蕃は　玄「何んじや、何を尋ねる　甲「エヽ今日是れへ來てお出でとの事を聞まして出ましたが信義長者の御子息俊德丸様と云ふのは何のお方で御座いませうか。玄蕃は

玄「ナニ俊德丸……俊德丸とは今あれにあつて舞樂の稽古最中何か用事があるのか　甲「ハイ少々俊德様に内々にて差上げたき物が御座います。其段聞て今迄話しをして居りました大島頼母が　頼母「アヽー此りや〳〵　和郎は何う云ふ者であると　甲「ハイ皆匿々の長者様へ商ひに出ます小間物を差上げ升る物で御座い升　頼母「ウムー然ふ云ふ者が今日その稽古場へ來ると云ふのは……　甲「ハイ内々にて俊德様へ差上げたい者があつて參りました　頼母「内々にて俊德様へ差上たき者がある……　甲「ヘイ……。所もあらうに今此所で餘傾の家來、影山の家來の居る前にて此様な事を吐くは扨ては此者愚かな者であらうか、イヤ〳〵左に非ず、慾かに見せて何か巧みのあとあらんかと一時は不審に思つて居りました時に何思ひけん玄蕃は其言葉尻りを取りまして　玄「アヽー待て〳〵　俊德殿に差上げる物がある

と云ふなら幸ひ今拙者は俊德丸に用事あつて是れまで參りし者なれば舞樂が濟んだ後御側へ參つて差上げる何んであるか差出だせヨ。と云はれた時に小間物屋は　甲「ハイ左樣で御座いますか……エヽ貴郎樣は失禮ながら何う云ふお方で……」　玄「私は鎌倉管領上杉家の家來玄蕃と云ふ者である。」と聞くより小間物屋は　甲「エフ……。」と慌いて那方を差して逃出ださうとするから　玄「己のれ曲者……。」と云ふと玄蕃の家來四五人がバラ〳〵と追掛けました、色青醒めて彼の小間物屋、其手を振拂つて逃げやうとする後から ウンと引たから仰向けにドタリと倒れる、玄蕃は大音揚げて　玄「コレ小間物屋、内ふくにて差上げると云ふ其一物を差出だせ、怪しき曲者かな悚中に手を差入れる小間物屋の與兵衛と云ふ男は一生懸命悚中を押へて　與「ふ許しあれ……お許しあれ是れは誰方にも御見せ申す事は出來ん

品、ふ許しなすつて下さい　怖いものの明けて見たき化粧の間　振分け髪のそつとする氣味　見ては成らんと云ふと見たいのが人間の情、猶更此者は怪しい奴と思つたる所の玄蕃が懐中に手を差入れ抜くより速く取直して見れば一封の書面表には只俊德樣とのみしてあります、蓋しには何も認めて無い扨て怪しいと見れば女の手跡、胸に一物あり氣なる玄蕃逃くも其封を切つて見れば這ん如何に影山の風女乙姫御前より俊德丸に送るの鮑書　玄「ヤヽヽ扨ては影山の息女乙姫は兼て信義長者の悴俊德丸に通じて居つたゝとか　と且は悦び且は驚き　玄「道は面白し〳〵　斯るゝともあり御とは實は玄蕃が心を注けて居つたのだ是れで今ゝ思ひ當つたり、俊德丸と不義をなし居るが爲に結納を取替すと雖も未だ

年も若かげれば今一年、モウ一年と婚姻を延ばして置たは此所なるか、好き者が手に這入つ、たと悦ぶ顔を見て大きに驚きました大鳥頼母が　頼母「玄番殿其お手紙を少々拝見……」　玄「イヤ御身に御覧に入れる事は相成らん　頼母「兎に角拙者にお見せ下さい　玄「然らば夫れにて御覧候へ万事の事は拙者より主人上杉に申上げ、屹度影山方へ御返答申すと憎く〳〵しく云ひました　頼母「イヤ兎に角御見せ下されたし、万一取拙へ事にてはあらざるか、吾主人の娘乙姫なる者は近國に聞へ高き美人ならぬや婚禮を申し込者許多あれば斯を艶書を作つて上杉家と影山家の婚禮を妨げ己れの方へ是れを奪らんとする悪人無きにあらぬ、偽作にては無きか其邊を尋ねたくチョッと御覧下されよ　玄「然らば……。と玄番は怖々手紙を頼母の手へ渡しました、頼母取上げ見れば成程乙姫の自筆に相違無い。吃驚ふところ

き頼母が　頼母「ア、此りや如何にも乙姫殿の御手跡に相違無い何んといたしたら好からう。と思案をしたが屹度思ひ直して頼母「アイヤ待て小間物屋、ウムー扨ては汝作りでをいたしたな此れへ持参つたのは此りや乙姫の手跡では無い……玄番「如何にも此書面は俊徳丸に差上げるには相違無いが決して乙姫の手蹟に非ず、其理由如何んと成れば某しの妹に初花と申す者あり幼少の頃より主人の娘乙姫のお側に附けて今日迄小間使も其初花の手蹟の文章なり、手跡と云ひ文の工合と云ひ吾妹に紛れ無し、某しの妹俊徳丸に恩愛なし、初花の名儀にては先方で承諾せざらんかと虚り主人乙姫様の御名前を拝借なしたは憎くき妹ふり、首切つて菅領殿へは申譯をいたろう、決て乙姫様に限つては左様な猥がましきふるべき道理も無し、玄番殿斯くの如き次第であり升から今日の所は是れまでとお忘れ

あつて何卒君へ申上げぬやう願ひ上げ奉る。と主人の妹を己れの妹の罪といたし其場を無事に納さめんとするが玄蕃はおかゝ〜聞容れません　玄「イヤ〜暫くお待ちなさい貴殿の主人の君を自らの妹に云ひおせど怪しき情交である事はモー篤く存じ居る、貴殿は何んと仰せあるも聞樂てならぬ一大事件是れより主人長崎新左衛門尉高景殿に申し上げて失禮ながら彤山どの信義長者の家は其儘には差置かん譬へ如何やうな事を御身が申されるとも御身は只主人の事を勞つて吾等を撥き無事に此場を納めんと云ふ計策、イザ去れば直ぐ御注進申上げんと行かんとする後より袖を扣へて頼母「イヤ先ヅ〜御待ち下されたし、万一某じの云ふ事を偽り言と思召すから此小間物屋を主人の前へ連れ參り、事の樣子を詮しませう。大鳥玄蕃と頼母が爭ひを見て小間物屋は　與「此りや飛んでも無

いゝをした此樣な人に物を聞かなかつたら好かつたが夫れじやア高景殿の御家來の大鳥玄蕃樣であつたか……。ビブル〜居を發はして居り升る時に玄蕃が　玄「イヤ〜其詮儀は此方ですると抽者が證人として連れ參ると玄蕃は立んといたした時頼母「アイヤ暫く玄蕃どの、兎に角只今俄返し申した艶書は御渡しあれ　玄「イヤ渡し申さん、是非とも主人の防へ連れ參り、詮議をした以上で無ければ渡し申さん、サ參れ小間物屋と云はれたに由て小間物屋與兵衛は　與「切望御勘辨に預りだし、預かりたし。と云へども玄蕃は聞かばこそ、與兵衛の手を取つて連れ參らんとする、小間物屋も流石は男、ア、ー詮方が無い夫れじやア兎に角先方へ參つて命が惜いから證人に成らう。と覺悟いたして行かんとした時に　頼母「與兵衛待て汝は飛が妹の初花に頼まれて艶書の使ひをいたしたであらうな　與「ヘイ

〜……。震へて居りましたが、驚も錄々立ん樣子。頼母「何うぢや玄「御獸りおされ、頼母殿御身は主人の娘乙姫の聘を無事に納めんとする某しが愚かなら此儘にも済むじやらうが然ふは成らん、主家に取つての一大小只是れなりけりに見逃しては家來たる者の役目が立たぬ、イザ小間物屋奪れ。頼母「イヤ何んと仰せられても是れ斗りは成りません。と左りには玄蕃が手を引き、右には頼母が手を引く、中へ進入て與兵衛と與此りや何うしたら好からうと心は二ッ身は一ッ芝居ならリへ這入つて寛ぎむ所であり升が何うして與兵衛中々然んな所では無い、ブル〜震へて居る、頼母は吃度思案をして刀の柄へ手を掛けるヨと相見へたるがパラリ與兵衛の首は前に落ちたりけり、玄蕃は大きに怒つて玄「イヤー何をする頼母、我方の大切の証人事の破れを恐れて手討にいたさるたな敵は御身なり覺

悟をいたされよ。と是れも刀の柄へ手を掛けましたが双方共にけり〜と詰寄る所も恰度天王寺樂堂の下に於て真劍振つて命の取り遣り、折しも是れに舞樂を見物に來つた人々は只アレヨ〜と騒ぎ立てる時しも恰好稽考の濟んだ俊德丸が俊「マア〜待つた兩人……。と其中へ這入りました未だ年端も行かぬ少年が是れだけの騒動を納める抑も此諍論の主人公、俊德丸が如何なる否を振ふか追々次回に逃べませう……

第五席

此時俊德丸は今一時鄙の稽考の休憩の時間樂堂よあつて遊りの景色を見廻して居りましたが遙か那方に人の立つ樣子。俊「是れは何事であるか。と御考へ遊ばして俊「仲滿ヨー仲滿は居らんか、ヤヨ仲滿此折仲滿も何やら先刻より那方に於て騒立つ樣子、心許無くは思つて居りましたが此度の鄙は容易ならざる

又は高位の人々の子息も許多あつて各々に此万秋樂の舞を覺へ、鎌倉へ出でゝ名を揚げんと何れも爭ふ其中ゆへ万一主人の御子俊德樣を亡き者にせんと入込みたる曲者あるやも測り難くと心を配つて居る所ゆへ主人が申付くる迄も無く己れは傍を離れる事は出來んから下僕に申附けて探らして居ります、其所へ俊德丸の一言に夫れへ出まして仲滿「ハヽア　俊「仲滿ヨ、何やら騷がしき那の樣子、アレ〳〵　見ヨ那れに見ゆるは白刃の光り、如何のゝとでありつるぞヨ。と問ふ處へ一人の下僕馳付けまして　僕「申上げます　仲滿「何んじや　僕「只今管領樣の執權長崎樣の御家來大内玄蕃と御當家御緣家の影山長者の御家來大鳥頼母と白刃の爭ひ容易ならざる騷ぎで御座います　仲滿「ヤー夫れは……。と仲滿は遽てゝ堂を下りんとしたが然し此騷動に紛れ、某しの居らざる内如何なる狼藉

者あるも斗り難く主人俊德の御身危うしと暫時躊躇う体を見て取つて俊德が　俊「イヤ〳〵影山の家來と管領の家來と爭ふとは大事なり、此身は案ずるに及ばんに由つて汝速やかに慈れ〳〵　仲「畏み候。とわつて仲滿は走る間遲しと堂を下り今互ひに立會最中　仲「待つた〳〵　御両人、暫く御待ち候へ此折玄蕃は玄「イヤ留立てするお、何人であるか、容易ならざる所の今日の立會ひ、大鳥頼母が命を落すか、大内玄蕃が命を棄てるか、留立ては無用々々……　頼母「ヨヽ、是れは仲滿どのでありつるか、拙者は今日玄蕃殿を差殺し共に命を棄てるの覺悟じや　仲滿「如何なる次第か知らねども管領の御家來大内玄蕃殿とは御身か、某しは信義が臣春藤民部之尉仲滿と申する者、何等の事があるかは知らねど御止さりなさい　玄「御身等のゝ出でゝ為さる所に非ず覺悟をいたせ頼母ヨ。と鋭く切込む太刀先きに頼母は段々跡へ

〳〵と切立てられる様子故無據く仲滿は刀の間へ割つて入り眞劍勝負の仲裁は、已れの命を惜んで居ては出來ません、大内が

玄「エイ……。と切込む太刀の下を潜つて　頼母「ヤッ。と云ふと

仲「エイ……。仲滿己れの体を引き玄蕃

玄蕃の帶に手を掛けて　仲「エイ……。と玄蕃大きに怒きまして　玄「何んだ、

を二三間向ふへ放り出すと玄蕃、亦た大鳥頼母両人一緒ント仲裁じやア無へ向ふの助太刀に來やアがつたのだ。と口には云はねど心の内、目を怒らして起上がり　玄「春藤民部どの御身は何んの怨みがあつて頼母の助太刀をして拙者を御役げなされた　仲「イヤ決て助太刀はいたさん御止め申しても御聞容れが無いから止を得ず玄蕃殿を役げましたが夫れでも御止まふなければ此仲滿が御相手だ、大内玄蕃、亦た大鳥頼母両人一緒の此仲滿に掛れと大音揚げて仁王立ち此時俊德丸殿も供人を連れて其所へ參り

俊「両人何う云ふ次第であるか兎に角此俊

德に任せるやうに……。此折大鳥は今乙姫様の文章の一條から〳〵と云つては却つて御笑に成らんから　俊何う云ふ次第だと云はれた時に一時言葉も詰りましたが結るに此事は確て仲滿は心得て居り升るゝと故　仲「兎に角大内殿一旦此場を御引取り……下され畢竟今日の騒動は頼母が乙姫御前の悪事を隠さんといたして種々の巧み事、當方の證據にも成るべき所の小間物屋を手に掛けしよう怪しけれ、仲滿に乙姫の手紙を示めして事を詮さんかと懐中へ手を入れましたが玄蕃も曲者イヤ待て、影山の家と信義の家とは同家なり、此りやうかつの事は出來んから何は兎もあれ　玄「仲滿殿、モー然ふ斯ふする内に日も入合ひに近からん、一旦旅宿へ立歸り事を充分に詮し、又逢て此事を内濟にしたいと両人より願まれる事なれば夫りや其時には考へがある。此れなん前申上げた信義の家に仕へる勘左

衛門同様なる人物、内済にすれば我腹もあると云ふのは所謂金銀頼イヤ各々互ひに此事を表沙汰にした所が益無いゐと、荒立つたのは拙者が悪るかつた、旨く折合の付くやうにしたいものだ。聞て春藤民部尉伸満、大烏頼母が　頼「コレ幸ひなり彼奴の今の言葉の端々、金銀盡くで何んな事でも出て來る奴だ、此りや所白し。と漸う其場を納めまして是れから伸満が万事の計ひ、影山か息女乙姫御前様いて主人が子息の俊徳丸殿、此人々に災難の及ぼさゞるやうに致したのは中々容易ならざる次第で御坐います、先づ今日は無事に散會いたしましたが然し昔しから云ふ色情の道には國の騒動も起る、災は天より下すに非ず、女より起ると云ふ諺むべきは色情の道で俊徳丸に伸満が先づ仲裁をいたしまして帰う玄蕃にも納得させ、兎に角其場は引取るゐことに成りました然るに大烏頼母は俊徳丸様続いて伸満にも一禮を

述べ、扨て言葉を改めましたる　頼母「就ては玄蕃どの是れから俊徳殿の御身の上に御氣を御注けなさるやうに其理由如何となれば當今鎌倉にて其權威を震ふ長崎新左衛門、彼の玄蕃が今日の無念晴しに如何やうな讒を拵へるかも相知れず、拙者方に於ても姫君に充分の用意をなし置き升る、卑劣の手段を以て如何やうなることをいたすも側られず兎に角今日は吾等も引取り申さんと双方共に成らずに納まりましたから安堵いたして帰るやうなもの、中々是れから後は油斷が出來んと思つて居る、屋敷へ帰るとハヤ其日も暮れて仕舞ひました、ふ話し變つて此所に又古への色のせかいと近郷に名も高安の里の素盛りを見する一ト樹こそ今の世にさへ其名ある有明姫と云ふ美女が、朝な夕なに愛したる由つて其名も有明櫻といつの程にか稍けたる其櫻の名木は、幹の大きある事は人間四人程掛つて漸

くに一抱へ八方に枝を亜れ其盛りは得も云はれぬ、景色で御坐い升、却説櫻は日本の名樹にして外國には無いと申升、去れば當今でも外國へ參れば櫻の花お當てある品を見ると日本の品であらうと云ふ位い、花の内では櫻か梅、然し梅は名木には相違無いが散り際が惡い、去れば花は櫻木八は武士、色は年增に止めさす……イヤ婦人の事は兎に角も而も彌生の中ば頃、花見る人は東西に群れ、南北に集り、己がまに〳〵櫻見物、辨當を携へるもあれば割子辨當の用意するもあり、又は團子や餅を携へるもあり、大變群集いたし升、恰好東京で云ふ上野か向島見たいな所でムいませう、扨て花見と申しましても全く花見る人は御座いません、花より團子で見つ見られつするもの、スルと此所へ參りました一ト群れは是れなん信義長者が御子息にて俊德丸花見の爲に多くの家來を召具して一ト木の許に床几を直させ、短尺

に歌を認め、櫻の枝に括し付け、又供いたした者も心ある者は各々に歌を詠み、或は發句をいたし、誠に機嬉克く花に戯むれて居りました、尤も此所は群集の場所を少しく隔て、前には河を横たへ遥か向ふには山を眺め、後は長閑き櫻の林、山水を一ト目に見ると云ふ景に富て風景の宜しき所、折しも向ふよりサンザめきたる一ト群れは何れも美々しき女連れ、那方の樣靈に腰打掛けまして此方を眺めて居りまする、距離も餘程離れて居りますから定かに夫れとは相分りませんが所へ、菅笠を深く被りましたる乳人めきたる女、俊德丸の傍く靜々と進んで參られまして突然笠を取り　女「御免遊ばしまし、貴方は信義長者樣の若樣俊德樣で居らせられませうがお　仲間如何にも左樣で御座る、お傍に居つた御句役が申立てまして、其折彼の乳人は　女「ヲヽ、左樣在するか、妾ゐとは影山長者が姫君乙姫樣の御用にて當野と申し

升る者……。此時春藤民部之尉は、仲「ヲー夫では何ふに見ゆる一ト群れは乙姫様の御連れおるか　女「ハイ左様で御座い升。俊徳丸は胸おどらして進み出で　俊「扨ては乙姫か能うよう今日は花見に参られた、鶯に晴れ〳〵として今日の花見は大當りである、聞りなば左様申し呉れヨ、俊徳丸も今日は憂晴らしの為北見に参りたり、能き折からであるから乙姫にも其群へ御通入りなされ一盞汲交さんに由つて早々其方へ参るやう申し呉れヨ女、畏まりました。ど女も元々夫れを云ひに来た所が俊徳の方から然ふ云つて呉れたので大きに悦びまして立去らんとした時に彷に聞居る仲満が　仲「アイヤ暫く御待ちなされ……若様夫れは御宜しう御座りますまい、聟へ貴郎が如何やうに思召すとも此間仲満が御諫言申シたる通り是等の事が謙倉執權長崎殿に聞へなば甚だ以て御宜しう御座い升まい　俊「成程、イヤ其方の申す所道理である……アイヤ夫れへ参られたる婦人、只今は悦びの餘り斯く申したるが家來の申す通り右等の事其筋の目に通入つては他家への聞へ宜しからず、何れ又其内に御目に掛る時節もあらう、安しう其方より頼はり呉れヨ。女「畏まりました、ど悄々として戻り行きました、俊徳丸は手の内の玉を奪われたる如く茫然として居りましたが俊「イヤ何んだか面白う無くなつて来た、戻らう〳〵……、と自身立んといたしたる其時に駆來たる影山の息女乙姫、乙「暫く御待ち遊ばせ俊徳様、妾にて候なり、爰て申上げ候通り聟へ妾は鎌倉の管領より申うし受けられ、此身の出精に成ればとて決て夫れは悦び申さず、女と生れた一生に良人と思ふは只一人、外日は有難き御文の御返事、只今是れに既身放さず持つて居り升る所迄思ふ妾ゆへ不悉と思ふて俊徳様、此上は幸ひ此所は貴郎の

御館も離れ、又二ッには妾の館も離れて居る故、何所にか直ぐに御連れ下さるやうに……日々鎌倉から矢を突くやうな御催促にて父君に於ても御心配、何卒妾の願ひをば聞て主へワッ……と斗りに泣きました仍に聞て居る家來の前をも憚からず斯の如きあとを云ふ、尤も昔しは女が皆厚皮敷いものと見へました何れを見ても昔しの色情は皆んな婦人から持掛けたもの、夫れだサ男子に權力があつたんです、去れば昔しは多く婦人が男子に懇願ひ、近頃の御婦人は可々く御利口ですから懇願ひ抔と云ふ氣の利かない事はいたしません、皆んな金貨頼ひ、紙幣頼ひ、金子さへ澤山あり升ると何んな婦人でも自由に成る、是れは滑稽の話し、夫れは閑話休題として内に那方此方より花見戻りの人々が此所へ造つて來て　甲「ヤー熊さん那れを見やれ、美くしい婦人では無いか那れは影山の御嬢さんや　乙「此方は誰れ

や……　甲「ヨー俊德樣や好い男やなア何うだい兩人揃つたら一對の内裏雛樣や　乙「アヽー剛ら好ェ婦人やなア　甲「エヽ男やなア　乙「氣合つて居るワイ精神莫は惡いよつちやと酒の機嫌か高聲で騒るとも無く騒る一言、此時伸滿俊德丸の袖を曳き　伸「若君の如斯な所を方一鎌倉の家來飛か意地惡るの玄蕃にでも見られるは宜しうでざらんから早う御歸館あつて然るべく存じ升る人目に掛つては御兩家の御爲に相成りません云われて俊德吾れに返り　俊「アヽー道理……万一大内玄蕃にでも見られては夫れゐろ家の一大事、去れば姫君又近日逢いませう。と俊德樣は心强く其場を立んといたした時に其手に道た乙姫か　乙「マァ〳〵伝つて我君樣、妾が斯までおうしても御前容れも無く振放して御歸り遊ばすとは情け無き御事かな、夫れなれば妾は一層の事此川へ身を投げ相果てます、是んだ以上は

北條には浮世を申さず、可愛さ餘つて憎さが百倍とやら君しから云ふ言葉の通り貴郎の御命は頂き升る……。と前後を忘れて抱付かんといたしました、看客諸君何んと俊德丸は斯る美人に死ぬ程惚れられるとは羨しい次第では御座いませんか、此の時俊德丸は如何はせんと思案に暮れて居る樣子を見て取る乳母と守役御年若の二人の身の上如何なる無分別を起すやも測り難くと思ひましたから互ひに何やら呟きました、仲滿は驚て相談が出來たものか　仲夫れでは然ふ……。と今迄連れ來つて双方の御供は跡へ殘し置き、俊德丸と乙姫と手に手を取つて御互ひに比翼の鳥か連理の枝早々に春藤民部殿が屋敷へ入らせられまするとと仲滿の女房を秋篠と申しまして、是れぞ本船の主人公にもいたすべき忠義の女中兩人を見るとハタ……と思ふ氣色にて驚て立出で　秋「先づ〳〵是れへ成らせられるやうに人目

に掛つては御宜しく無い。と二人を連れて奥座敷へ入を離した一室にお入れ申して座を改め秋篠の申すには　秋「今朝鎌倉の長時新左衛門高次殿の御使者として大内玄蕃と云ふ侍が御上屋敷へ着せられ、俊德樣は來年御法事の御樂の稽古組畧なる山開及び不沙汰千万遂には万秋樂と云ふ大切の御舞も更に御稽古も無く、昨今御身墮弱にして怪からぬ御事、尤も此万秋樂は尼御臺樣の百年期に付日本六十餘州の人々も鎌倉に參代なし、打見する程に充分に御舞を遊ばされば相成らぬ、且又許多の樂人ある中に信義長者が忰の俊德、是れぞ平生身持ち正しく誠の人と心得て斯云ふ大役仰せ付けられしを組畧に心へて、今日此樣の行ひは不屈き至極の至り、速かに鎌倉へ御通れ申し、執權高次樣御前にて充分の申譚いたさば好し、万一申し譚ならざる節は既度處分に及ぶべし、今日主人の命に由つて推參したとイヤモー

容易ならざる沙汰にて如何にも心配をいたして居り升る、然るに何んぞや長郎方御兩人は御手を取つて成らせられるとは何事で御座いまする、今日北玄蕃と申す者が斯る事を申して參る、は元はと云へば乙姫様と若君様との御交情を知つて居る故高次が穏の遺恨の意趣晴し亦何んな事をいたすかも知れません、泣く子と地頭に勝たれぬと申す仮令の通り先方は名に負ふ執權職、此方は御身分はあるとは云へ今民間に下られて居る御方く〳〵、彼等に恨みを含まれては何んな事をされるも知れず、兎に角此有様が玄蕃の耳にでも這入つては大變、何れ伸滿が何とか工風をいたしませう程に此所に暫時御隠れ遊ばせと慰しげに物語りました間くより俊德は　俊、秋篠心配を掛けて誠に相濟まぬ、某の心より伸滿を始め和女に迄斯く心痛をさせるは面目次第も無い、ヨシ〳〵　此俊德が鎌倉へ參り、速かに執權の御前に

罷り出で武士かれば立派に腹切り詫なし、和女や伸滿、又二ッには此姫の難儀をせんやうに致するに由つて必つ〳〵心配いたすなヨ　秋「是れはしたり若君様には又其様な御心弱いなと仰せられ升る、死は一旦にして易く生は難し、死ぬるは何時でも死ねまする故先づ〳〵良人伸滿と此秋篠よ任せ遊ばせ、良人は只今出でられましたが執權の御前に出で、御詫をすれば又執權から管領へ何とか御詫をして下さいませう、決て御心配なさい升な、又御兩人が御必得遊ばしても遊ばした時は今迄良人が尽したる骨折りは皆水の泡と成つて仕舞ひ升る、マア〳〵　御心易く御隠れ遊ばせ。と本意では無いが斯う成つては詮方が無いから秋篠は呉れ〳〵も云つて其儘其所を下りました、跡に残つて乙姫俊德、ヤレ逢うて嬉しやと思へば又氣掛りな事が出來たのでありますから互ひにホッと太き息を吐きましたが跡は何

う成つたか演者も是れを知らず、仲滿も是れを聞て大いに心配をいたし　仲滿「過日少しく爭ひし事もあれば彼れ是れ遺恨あ心へて如何やうな事をするも斗り難く、左は然りながら何程の事やあらんイザ表沙汰と相成つて主人長者が家の破滅にもなりなば其時あろは此仲滿が命に替へても宥譯なさんと覺悟いたして居りましたが天此忠臣を感納あらば必ず能き事に至りませう、扨て是れよりは人間の病の器、何日何時病ひの床に伏すも測り難く月に村雲、花には風しの譬へ、斯く迄美くしき處の俊德丸が業病に掛つて大坂千日前、往來の絶ぬ繁華の街に業を晒すと云ふやうな珍談に至り升、是れは次回に述べませう……

第六席

爰に又俊德乙姫の二人は歎きの中の樂しみは未だ年若の二人ゆへ是れは無理も御座い升まい、秋篠が種々心配をいたして聽

て一ト間を立出で椽へ掛つて參りました時、這は如何に庭の隅なる植込みの中に何やら怪しき所の人の影、大抵の者なればキャッ……と云つて逃出だし升るが仲滿の妻の秋篠、女ながらも勇々敢き者であり升から薙刀の一手位いは心へ居りますから障子の内にツヽと入り、懷劍を帶の間だへ挾んで再び椽側へ出まして息をも次がづ樣子を見て居りました、所が曲者は斯るあとゝは露知らづ、植込みの中より忍び出で、抜足差足忍び足、椽の傍へ近寄りましたが小側には何やら獲物を携へて居りました今や椽へ上がらんといたした時に秋篠は　秋「待てつ……。と一聲掛けました曲者はアッと驚き逃げんとすると後から　秋「ヤー〳〵曲者良人の不在を考へて忍び入りしは盗賊あらん、仲滿の女房が手並みを見ヨや。と懷劍引抜き切掛れば曲者は這は叶はじと思つたか飛石傳へにバタ〳〵〳〵と逃出だしたが亦

思ひ返した者と相見へ、グルリ回顧つて　曲者「ナニ女の分際と
して乃公に向つて刃を向けるな、心へたりと獲物を取つて切込ん
で來る、所を秋篠は体を變し、突然手許に踊り入り　秋「ヤッ……
と言様懐劍にて肋骨をグサと突かんとしたる時に曲者はハス
に体を變した機みに左りの二の腕を少々切りました　曲「是れ
は叶はぬ中々女でも腕のある奴……。ドン〳〵逃げて行くか
ら　秋「待て〳〵〳〵と追駈けて來る内に向ふの塀をヒラリと
乘越へ表に飛出だしましたる故秋篠は猶も屈せず、庭の開きを
押明けて外へ出まして彼の曲者にムンズと組付く　秋「各々出
逢ひ候へ、各〻出合ひ候へ、誰も居らんか。と云ふ時一人の侍駆來
りまして　家來「是れは奥様で御座い升るか　秋「ヲ、早う〳〵
……逃げやうといたしたが彼の者逃げる事は成らず、遂々押へ
付けられました故苦しさに堪へ兼ねて　曲者「暫く待つた……

今姓名を名乘るに由つて一命だけは助けて下さい。剛氣の男と
思ひきや卑劣千万の一言に秋篠莞爾と打笑ひまして　秋「若の
乘許してやらアしやれ、過つて改むるに憚かる事勿れ卑を憎ん
で其人を憎まず、助けて呉れヨと云ふかれば兎に角此所を助け
られヨ、サ、和郎は何者であるつるか　曲者「ヘイ。と云ひながら
被つて居り升被取つて見ますれば年齢四十二三に成る逞ま
しき所の男　曲者「イヤ恐れ入つた沈石は春藤仲滿殿の御家内
だけあつて男子も叶はぬ美事の振舞、私しは鎌倉方の家來にて
乙姫俊德丸の不義を知り、二人が首掻切つて鎌倉へ持參なし褒
美の金子を貰をうと思つた甲斐も水の泡、太ヒ事ア出來ぬへも
のだ大概なれば男の五人や十人を相手にしたつて負けるゐと
の無へ此乃公だが天の罰か婦人の爲に召捕られて斯くの有様
切望マア今御家内の云はれた通り罪を憎んで人を憎まずとか

云ふ君子の戒め、命ばかりは助けてゐ呉んなさい、モー此冒葉で大抵分るだらう、兩人の方に遺恨や意趣があるでは無し、只褒美の金子を貰つて好な酒を飲み、旨ェ物を喰つて女を愛してへばかり極く男の無い者で御座い升から切望許してゐ呉んなさい斯の通りで御座います。と手を合して居る秋篠は片腹痛き思ひにて　秋「コレ皆の衆、取るに足らざる此者の心持ち、逃がしてやらしやれ　甲「アイヤ御内室樣只逃がしてやれと被仰つても斯ふ云ふ奴は又何んな事をするのも知れません、寧その事首切つて仕舞つた方が後の憂へが無く、つて好う御座い升。と一人の侍が立上がりましたスルと曲者は手を顏に當て　曲者「ワッ……と泣出しました、此聲に追々出て參りまして呆れて見て居る、秋篠は　秋「此りや吃度愚か者、男として恥かしい聲を出だして泣出すとは呆れたもの、許して遣るが好い。一同も噴飯して　甲「成

程此りやア許して遣りませう　秋「如何にも……コレ〳〵其文は何んと申す者である　曲者「ハイ先刻より御優しい所の御言葉、私は鎌倉管領の家來　秋「ウム直臣か　曲者「イェ長崎彦左衛門と申す今管領に代つて政を握つて飛ぶ鳥も落る程の勢ひのある方の家來大内玄蕃と申する者……　秋「待て〳〵大内玄蕃の顏を見知つて居る其方のやうな者では無い　曲者「イヤ其家來の犬山伴六。傍に居た家來が恐ろしい手數の掛る野郎だ、犬山伴六とは少しは名を聞いた男だが其の又家來であらうがな　曲者「イヤ〳〵犬山伴六で御座います　甲「奥樣助けて遣りませう犬山伴六とは兼て少しく聞及んだ名前、正逆手放でワー〳〵泣く奴でもありますまい、大方其又家來の又家來、又々家來の又家來と云ふものは白痴者なれば殺した所が張合が御座いません許して遣りませう　秋「ヨー許してやれ……然し此りや伴六

とやら信義長者が家來には春藤民部之尉仲滿、又妻の秋篠あり大内玄蕃が千變万化の術を以て惡計をなすと雖も正道を以て拒ぐと雖も邪は正に勝たず、必ず旨くは參らんに由つて左樣心得られよ、命は助けてやるに由つて早う行け　曲者「有難う存じます、じやア御助け下さい升か、決して此御恩は忘れはいたしません。と犬山伴六と云ふ白痴者は面白無げに狐鼠々々にして逃去りました有樣は尻に帆の無い溝鼠の如く目も當てられぬ有樣で御座いました不善をおして功名を得る者は人是れを討たず天人に代つて是れを誅すと云ふのは孔子の言葉、理非を辨へぬ大内玄蕃は主の風光をカサに着まして人を見るゝと芥塵の如く其古へから當今に至るまで上の威光をカサに着て歴帝の事をするのが如何程もあり升、當今と云つても明治政府じやアありません、是れは口演者のお世辞でげすが却説も大内玄蕃は是

れより泉州に趣きまして影山長者に對面おし　玄主命に由つて能り越したが姫君ゐと此度拙者と同道の上、鎌倉に下向すべきの象て御沙汰であるに由つて推參いたしました、影山長者は遂此間姫は俊德を連つて一時家出をいたしましたが、仲滿が妻の諫言に由つて鎌倉への聞へも宜しからづと云ふので漸々歸宅いたしました、夫れを知つて來たのであり升、ヤレ嬉しやと思ふ間も無く只今鎌倉管領よりの使者然も大内玄蕃が出張いたしたのであり升から何んと回答んやうも無く悉とく胸を痛めて居りましたが此時大鳥頼母は主人に代つて玄蕃に對面をいたした、スルと玄蕃は意猛高に成つて主人長崎のが書面を出だし　玄逃かに乾度御返辞を願ひたし。と口數利かぬ嚴しき談判頼母も一人で返辞をする事は出來ないから　頼「暫時御待ち下さい。と云つて主人影山長者が許へ持參りました、長者披ひて見

ると此度は是非乙姫を玄蕃と共に差向けろ、内々の事情は新左衛門高次が能きなに取扱うに由つて心配無く速かに御渡しあれ、万一今日拒んで渡さぬ時は御身の家自滅の原因容易ならざる事なれば武士の義を以て此書翰を遣はし候なり、呉れ〳〵も乙姫を鎌倉へ下し玉へと何所までも威權をカサに被たる書面の文句、此時影山長者は頼母に向ひ　長者「アヽ何うもハヤ詮方が無い、斯まで新左衛門よりの書面であつて見れば彼是は申せば家の自滅、兎に角姫に一應此由を其方から談じて假令俊徳を幕うとも親が大切、家が大事と思ふから切望一度は縁と云つて鎌倉へ下つて呉れるやうに一旦嫁したる後なれば改めて暇を貰つて其程遠う俊徳丸なら妻にさせない者でも無いから一應姫に申せ頼母は　頼「畏まりました。と直ぐ姫君に申入れました所乙姫は　乙何うあつても妾は鎌倉へ參るよとは嫌じや、斯

く申すと父上の仰せに背くやうかれどモー此上は俊徳様の許へも嫁せブ、又鎌倉へも參り申さぬ、以來は女と云ふ字を棄て佛に成つて此世を去らん、頼母切望父君に宜しう申上げて呉れ、妾はモー佛であるぞヨと如何にも此時は乙姫も覺悟をしたものと見へまして真心夫れに見へましたから流石の頼母も言葉を盡すべきやうも無く止を得ブ主人の前に參りまして　頼母「姫は斯様々々申し升る。と云つた其所が所謂親馬鹿、上下押並べて親子の情、別に變りは御座いません客間あては大内玄蕃が　玄「取次衆御返辭は如何で御座る姫君が御承知無ければ無いで宜しい、某が方でも了見がある、無ければ無いで宜しいから速く御返辭を願ひたいと此方の心配にも拘はづして己が我儘勝手の一言、取次の者は少し言葉に針を含み　取次「先ブ暫く御抑へあるべし急がれ玉ふな。と言葉を盡いて奥へ通入つて頼母に斯く

〈と玄蕃の應言の事を申す　頼「思へば〈悩くき奴と頼母は歯噛みをいたしたが夫れとても詮無きゆゑで御坐いまして如何はせんと心を碎いて居りましたが　頼「イヤ宜しい左様なら拙者から玄蕃に一應好きなに申して見ませう。と早速夫れへ出て参りまして　頼「大内せの嘸御待詫しう御坐いましたらう　玄「左様〈　上方武士は失禮ながら御氣が長いが鎌倉武士は氣が短かいから待勞れて居りました、ジテ御返事は……　頼「去れば玄蕃どの我申す事をとつくりと聞て下され如何にも姫は鎌倉へ参りたいと仰せられたが又に一ッの難義あり、此度姫君は世の味氣なきを思ひ、煩惱の掛を切つて佛門に入らんとの御志ざし……　玄「イヤ〈大島どの云ふまでも無い拵へ事と聞くに及ばん其やうある事は聞く耳は持たん　頼「アイヤ待たてよ玄蕃どの皆まで聞かつ其御一言　玄「然らば跡は……　頼「夫れ

じやに由つて鎌へ上様方へ嫁くと雖も佛門に入つたる姫なれば男女同衾の事は猶更却つて御手數の事もあらん、夫れよりは折角の御事ではあるが是れにて御破談を願ひたい。と尤も頼母は大内玄蕃に向ひまして成り成たけ心の納まるやうに改めて見たりすかして見たり色々言葉柔かに申した故玄蕃は面に笑を含み　玄「成程、成程……道理千万、相分つた公らば斯様いたろう拙者は此度主人の命に由つて乙姫殿を御迎ひに参つた者だから然らば兎に角鎌倉へお出でなさい、嘸へ人が何んと申ようとも斯なる以上は拙者も大内玄蕃じや、主人に姫殿の一言を申入れ拙者がお世話いたして鎌倉には尼寺數多あれば何れかの尼寺へ入れ申さん、殊に今回は尼公の五百年期とあれば猶更尼と云ふ字に繰もあれば鎌倉にて常々かる尼にして差上げやう、万一新左衛門殿が夫れは成らんと云つ

たる時は其折よそは某しは主に向つて抗辯あし、夫れにても聞かぬ時は主を差殺して切腹いたすが武士の習ひ然ふ成れば然い話した承知いたした、只此儘で拙者歸る時は主人に對し偽りを拵へたやうに成つて甚だ難儀いたす宜しい拙者が引受けた……。と一人飲込みの大内玄蕃が心あり氣の言葉の節々、斯ふ云とれて見ると詮方が無い、大鳥頼母も實に弱つて仕舞まして

頼「左様なら大鳥氏必ず尼にして下さるか　玄「尼にするとも屹度尼にする、方一何うしても乙姫を渡されんとあつて見れば其しは此處で切腹いたす外は道が無い、手前を殺しては鎌倉へ各々達が済むまいかと存やる　頼「如何にも仰せ御道理に存やる暫時御猶豫下されよ。と頼母は其場を立ちましたが一ト足歩んでは如何はせん、二足進んでは何うしやうと思案に暮れた長廊下主人に何んと申上げんと心を碎くも忠義の爲、漸やくにして影山長者の前に出で「云々斯々」と申入れました、長者はモー覺悟をして　影「好し〳〵……然らば娘一度鎌倉へ參れ、今强情を張通しては和女の大害、夫りやア佛に成るのは彼是れは云はんが今云つて呉れるおければ此父の難義、信義長者が難義、俊德丸の身の詰り、四方八方難義のみと、唯和女一身にあるぞヨ、父の言葉を用ひて一度鎌倉へ下つて呉れヨ　乙「ハイ畏まりました、何んといたして父上の御言葉に背きませうや、二ッには又俊德様の御難義とあれば猶更妾が身に替へても參らねば成りません、一旦思ひ込んだ戀人の爲にするのも操の爲、之が孝の爲なれば快ろ參り升る、委細承知いたしました親の前をも憚からず俊德を抽へて慢人とか、扱て〳〵能くも惚氣たもので御座い升、傍に聞居る頼母も悦び　頼「夫れでは明日鎌倉へお下りあれ　乙「ヲヽ、頼母心遣ひ太儀であるぞヨ、妾は鎌倉へ參る間其方能きに取計

へ　頼「捉まりました。と直様大鳥玄蕃の前へ來りまして　頼「大内氏イヤ誠に先刻の御一言辱け無し、然らば漸うに事極つた姫君明日御同道申さん　玄「左様か夫れは悦ばしい、鎌倉へ參らば充分大内が主人に申上げ跡は能き事に取計ひ思ひ通りに姫君は尼寺に入つて尼と成つて天晴名を殘させるやうにする芽出度い〳〵　頼母は彌々言葉を和げて　頼「大内殿御身とは外日及抜合つたゐとがあるが夫れは互ひに忠義の爲、斯く成つたる上からは貴殿のやうな御方を兄と致したら定めて好からん何んと兄弟の盃をしては賜らぬか。大内は　玄「イヤ此りやア恐れ入つた御一言、拙者も固より望む所、左様御座らば年嵩ゆへ某し兄と成り申さん　頼「早速の御承知千万辱け無ふ御座る。爰で酒肴の仕度をして兄弟の盃を　玄「いたした、心にも無い奴と苟にも兄弟の盃をいたすと云ふも忠義の爲、口と心とは大違ひ、憎くき奴

とは思へども然し姫君の御身大切と思へばゐそ大鳥が万事の手ひ此方は大内が腹の中　玄「白痴者め乃公の盲闘を眞實に心得て見ロ鉢ての恨遺返し此所にあり。と口には云はねど心の裏切も世の中には大鳥大内の如き理が多い、其所で其翌日は仕度をいたして姫君は充分の化粧、御身拵は固より御附者の万事万端仕度をいたして乙姫は父の御前に両手を突き　乙「父上様左様なれば鎌倉へ……　長「チー〳〵　能く其心に成つて呉れたサ是れから、は何事も時節を待たれヨ時を待たれヨ、枝を曲げて木を枯し、角を切つて牛を殺すと云ふ事は辨へて居らうな。流石は影山の一言、木の枝は切時が悪るければ枯れて仕舞ふ手の角て其通り切るべき時に切らねば殺して仕舞ふ其方が心得違ひをすると一同の者が難儀をすると夫れとは無しの意見の一言固より利口の乙姫は皆辨へて居り升けれども忌れが長き

別れかと思へば流石に懷かしく……とは云ひ兼ねて挨拶も濟み、涙片手に玄關に出づれば今迄待づいて居つた女中達も甲、お嬢樣然らば鎌倉へお出でに成り升るか。と別れを惜む、何んにも知らぬ浮氣女は　乙「お姫樣御嬉う御座いませう。と云ふ　乙「嬉しい所か寧そ妾の心を打明けたなら却つて皆んなが歎くでせらう。と何んぞも云はづ御乘物の内に這入る、扨て却つて身分の重ひ人だけあつて斯ふ云ふ時の情合は薄いもの、下等の者ならば親お其所へ來て充分の惣談も御坐い升が……尤も下等社會で駕籠へ乘つて嫁に行く者は稀少ない駕籠へ乘るのは病氣の時か死んだ時ばかり、此所で姫君は乘物の内へ這入り升る、大内玄番は駕籠に附添へ　玄「大烏氏必づ御心配あるな、鎌倉へ參りなは速かに若手手紙を差上げる御安心あれ御一同左樣ならば……と挨拶ソコ〳〵駕籠が上がる、段々屋敷を離れた時大内玄

番莞爾笑つて　玄「サ此上は乙姫の傍に居る者は一人も無し不事に鎌倉へ連れ參り、否も應もあるものか主人長崎に差上くれば夫れだけの御取立ては云はぬと知れて居る、万一兎斯ふ云つたら信義が家、影山が家は滅亡するだけのみと是れにて腹癒せが充分出來た。と心の裡で手を敲き道を急いで段々と參りまする、乙姫は駕籠の内にて一歩〳〵と段々故郷を離るゝ心地して何と無く悲しさも彌勝り、夫れに就けても明暮れに忘兼ねたる俊德丸、又二ッには父君が嘸御心配……と思ふより堰來る涙押止め、是れなら見た事も無き鎌倉へ參りなば上樣殿の傍らにて思はぬ人と邂はれば成らづ大内玄番が鎌倉へ參りなば必づ尼にして遣ると云ふのは屋敷を連出す手段、万々尼にして下さるのではあるまい、外目春藤の屋敷にて花見戻りの初契り良人と思ふは俊德樣より外には無い、貞女兩夫に見へづとやら、趣

れから鎌倉へ下向して尼に成れねば何んとせう女の道を破る
より寧ろ死んだが増ならん、畢竟妾があればあそ父や信義様の御
家の迷惑、亦俊德様の出世の妨、妾が死んだあとなれば鎌倉殿も
諦めて後の祟りはあるまい、サー然ふだ〳〵。と覺悟を極た乘物
の内、昔しの女は皆な斯ふ云ふ片意地の者で其所に價値があり
ました、尤も其御籠はなか〳〵大内玄蕃は油斷の無い奴、万一途
中信義が一族、又は影山方から追手が來て姫を昇奪らんも測り
難くと乘物は充分に鎖し、外から錠を下して囚人同様の取扱ひ
然ふだ〳〵と姫君は家を出る時持參をいたした守刀聲は立ね
ど口の内　乙　先立不孝は許して賜はれ、我父様、又俊德様那まで
交せし事とも反古と成り相果るは情け無き事には候得共是れ
までの御縁と諦めて賜はれ　又信義長者様、仲滿夫婦、大烏頼母
色々苦勞を相ひ掛けて死んでは花は咲かねども又た禮をする

時節もあらう是れが此世の別れであり升る南無阿彌陀佛、南無
阿彌陀佛……と云ふより速くグザと咽喉へ突拔きました、當今
は開け往く世の割合に悩死怀をする者が澤山御座い升が是れ
は佛法の妄信から起つたもので人間死んでは詰りません存命
で居ればあう又好いあとも為り升る、昔しの人の歌に

我命終るものゝ為は是非も無し

九十九までは過でしてそのち
隨分慾の深い人です、所がモー一杯上へのがあり升
冥土から迎ひに來たる其時は
百六ッまでは不在とゝたへヨ
是れは中々慾張つて居り升、スルと又上手のが出た
るすと云はゞ亦も迎ひに來るならん
いつそ嫌じやと言切つてやれ

生涯死にたく無い、成程然ふで御座いませう、能く御年寄りが神佛の前にて拜んで居り升のに後生大切や金子慾しや、死んでも命のあるやうにと云つて居り升、去れば十遊舍一九と云ふ戯作家は粋な辞世を詠みました

今迄は人のゐとだと思ひしに
成程是れが人情でせう然し一休禪師の道歌に
乃公が死ぬのかゐいつァつまらん
世のりは喰つて寝して起きて
扨て其次ぎは死ぬばかりぞ

是れは悟りの歌で御座い升、イヤ斯んな事を演じて居つて肝心の本文が遅くなはりました、然るに駕籠の傍に居つたる人々は更に氣が注かん、漸く六尺が氣が注て　甲「モシ玄蕃様何んだか可笑う御座い升ぜ　玄「何が可笑いのだ　甲「何んだか知りません

が駕籠の内でうなつてゐ出でなさる　玄「然ふかッ……待て〜と途中に駕籠を留めさして大内玄蕃傍へ來つて　玄「姫君何うなすつた、姫君ヨ。二三度呼べど回答無くウムー……と云ふ聲　玄「是れは可笑いと退しく腰より鍵を取出だし錠を明け駕籠を開いて見れば道は如何に俯向きに成つて遊りは一面唐紅ひ、右の手には懐剣を逆に持ち然し然いたのは立派な死方人間は腹を切つて仰向けに死ぬのは死顔を見せるのであり升から極く恥です然し大抵の侍でも腹を切ると苦しいから多く傾けて返る餘程平生心掛けなければ是れは出來ません、彫山の娘乙姫は咽喉を突て美事の最期、玄蕃は　玄「ヤー大變だ〜姫が自害だ六尺が北所へ出まして、六「切望玄蕃様モー駕籠を擔ぐのは御免を蒙むりたいもので女の死骸を擔いぢやア歩けません。所が是れから死骸を以て鎌倉へ行く理由には行かつ何うしやうと

思つたが　玄「詮方が無い跡へ歸れ……此りやアフンでも無へ事に成つたと暫時玄蕃も思案に餘つて居り升所へ遙か跡より甲「ヲーイ……ヲーイ……と云ふ聲、扨ては何者が參りしかと大内玄蕃回顧ると大烏頼母が股立ちを取上げ息をば切つて踝足の儘一人の供を連れまして馳參りました　玄「チー扨ては兄刻頼母が言葉巧みに拙者をば兄と頼む抔と云つたのは虚言、矢張り駕籠を取戻さんの計略か、心得たりと大内も刀の柄に手を掛ける、漸く傍へ近寄りましたから　玄「頼母殿其御樣子は何事ぞ頼「イヤ容易ならざるゝことが出來た玄蕃どの許して下されとドッかと大地へ坐して胸を叩き　頼「申す言葉の前後は御免蒙むるが那れ迄拙者が御受合申して姫君を鎌倉へ御連れ申さんと御受合申したるに豈測らんや却つて御身に苦勞を掛け甚だ拙者が相濟ん。前後分ぬ一言に玄蕃は夫に突立上イヤ〳〵頼母どの

心を定めて申し候へ、夫りや何事で御坐る　頼「只今姫君は御座敷へ御歸りに相成り如何の事でありつるかと尋ねれば姫は只泣くばかり何うしても鎌倉へ參るのは嫌じや尼法師と成るなれば屈敷に於いて尼法師と成らう、其故駕籠を破つて只だ一人是れ迄逃げ來たつたのじやしやに由つて父上に知れないやう和郎の家に隱匿呉れヨ左無き時は命を落すと懷劍逆手に持つて全るで狂氣亂心拙者の考がへには途中に於て駕籠を破つて逃歸りたるものと思ふ、斯成る上は拙者何んと申譯が無い、大内殿御察し下され、取敢ず是れへ御詫に參つた。と聞くより大内は　頼「エヽーナニ姫君は貴殿の屋敷へ……暫く待つた頼母どの。と再たび駕籠の戸を明ければ以前の通り姫の死骸はあり升る　玄「頼母どの何んだか更に相分らん姫は先刻自害をいたして相果た、最早只今は手先も冷めたく成つて居る、此りや妙だぞ大烏ど

……の其死んだ姫君が影山館へ參りしといふ、イヤサ御身の家に害をいたした姫君が……サ扨ては姫は御自害……　玄「サ自覺なさい　頼「チニ駕籠の内を……。と云はれて頼母はワカ〳〵

頼「ヤヽ此りやア姫君……。死骸を抱て　頼「此りやア全体何うしたあと、先刻我家へ飛參らせし姫君も矢張り御手に懐劍を持つて居られた御姿も此通り、扨ては魂か……モシ姫君ヨ……御氣を確かに持たれヨ。と呼べど呼けべど玉の尾の切れて回答もありません。と抱起して二三度四五度呼びましたが何んの印しとても無く眼を佛顔に閉じ、右の手に懐劍を握り左りの手に胸を押へて立派な御最後　頼「夢では無いか、夢あら醒めろ……イヤ〳〵斯ム云ふ時に尾込んで狐狸に魅られる事が無いとも云はれない。と我身で我身を抓つて見れば痛いゆへ夢では

無い　頼「兎に角大内殿姫の死骸へ一度跡へ御返し下され。玄「番も何んだか理由が分らなく相成りました、家來が　甲「夫れじやア大内様姫の身体は此所にあつても心は影山の方へ往つたんでせう不思議なるあともあるものかな。と少しく怪力亂神のお話しではあり升が開明の今日にも人間の心は往くと云ふ事は諸新聞などに折々出て居り升る如何様左もありなん、爰に於て兎も角も姫の死骸は大島頼母の宅へ引戻し、長者の許へ此趣きを上申いたしました、長者は驚いて泣くに涙も出づ呼ぶに聲さへ出でざるは道理せめて哀れなり、亦此處に信義長者が方より春藤仲滿が遽しく飛來つて姫君の御姿を見たと云ふの一件からサア斯ム成る上からは存命して返した姫君を死骸で此場へ搬ざ込んで何故殺したと玄番を責める、主人影山長者は温厚柔和荒立つたる事を御嫌ひじやが此二人は何も事を好むのでは

無いが兎角暴威を震ふ長崎の家來を困らせるの一談より俊德丸が業病のお話し……

第七席

影山長者は最愛の娘に敢無き最後を遂げられ悲歎に暮れて居り升が其歎きの中にも又姫が鎌倉へ參るを嫉ひ自害したるを遺恨に思ひ如何なる手段を搆へて此憤慨を晴すやも測り難くと心配をして居り升、スルと其翌日の事、信義長者の家來春藤民部仲滿が大鳥賴母の所へ參つて　仲「昨夜姫君が參られて申されるには此の度鎌倉へ愈々參るよと成つて乘物で家を離れなしたが何分にも俊德樣の事を思ひ切れず、密ろかに乘物を破ぶつて逃げ參つたに由つて切望仲滿俊德樣へ逢はして賜はれと狂氣のごとき有り樣にて妻も秋篠も驚ろいて御意見申し上げると雖ども聞き入れも強つての賴み、據ろ無く一室に御隱し申上げたる所昨夜に至つて其室の内に御姿見へず、扨ては思ふ事の叶はず万一叶ふた所で焦慮たいと云ふ思召しで密かに一室を拔けて信義長者の屋敷へ參られたる事にはならざるかと直樣主人方へ馳付けて右の次第を申上げたる所只驚くのみにして知らずとのお上俊德樣の仰せには大方鎌倉方の大内玄蕃等が計略を搆へて姫を盗み出だしたにはあらずやと上を下への騒ぎ万一御心當りでもありはせんかと參つた次第……。と聞て賴母は亦も奇異の思ひをしぬものと見へたり、仲滿ぞの決して御驚き御無用……實は斯れ〳〵云々聞て驚く仲滿は　仲「ヤ、ヤ、夫れでは拙者の方へ參られしは其魂が參られたるに相違無し、アヽ情け無き御事かお痛はしき御事かな……と暫しは侍なから涙に暮れて居りました、賴「昨日ての事に　仲「イヤ賴母ぞの、其玄蕃は何れに居り升る

以來當家に泊め置きました、御用があれば案内申ろう　仲「仲滿は仲滿だけに彼に掛合はなければ成りません、御案内を願ひたい　頼「然らば是れへ……○兩人打揃つて玄蕃の居間へ參りました、扨て一樣の挨拶濟んで改めて玄蕃に向ひ　仲「玄蕃どの、兼ねて〳〵御身は己が主の爲かは知らねど我主人俊德丸と影山の娘乙姫と有もせぬ事をあるが如く不義をなした抔と云ふ爲に姫は遂に自害をなされたり、モー此上は姫君の敵である、此死骸は引取り申されぬ　玄「ウム何故引取れぬ……生者必滅會者常離人間一度は死ぬのは當然、サ何故引取り申されぬ　仲「殺して戻せとは申さぬぞヨ　玄「アイヤ仲滿待つた其掛合おら賞殿の申す所に非ず、俊德丸を殺したるにあらず、是れは頼母より御掛合あるが至當ならん御身は信義の御家來も皆同腹あるぞヨ　仲「イヤ〳〵影山と信義の家は一家なり影山の家來も信義の家來

も皆同腹なるぞ頼母に代つて某しが御掛合申する何んの憚かる事あらん……如何にも大鳥殿左樣ではござらんか　頼「御道理千万……サ姫君の死骸は元の通り存命して御返しなされ　玄「此りや何うも因つた、死んだものを存命して返して呉れ抔とは出來ない相談然ふは參らん　仲「參らんとあれば大内殿云つて聞かせる外日天王寺の樂堂にて俊德樣が舞樂の稽古の其時に頼母殿の妹が俊德丸に差上げる艶書に就て頼母が再三詫入るのを聞もせで其時ゐう何んと云はれた主人の爲には家來は命を棄てる皆んな是れも主人内管領の爲なりと言はれたるに非ずや、サ吾々も主人の爲兩入が命に替ても姫君の死骸を蘇生して貰はにや成らん万一死したる死骸は活かされまいがな。ヒ左右より詰寄せられて玄蕃は齒を喰紋つて居りまして、切つて棄てんとは思つたが向ふも武士、然も二人揃て加へて仲滿には

天王寺で投げられた事があり升から手出しも成らず何如はせんと思つたが　玄「宜しい委細承知いたした然らば此姫君を蘇生して進げる　頼「ナニ存命して下さる……　玄「ヲヽ如何にも……　頼「道は面白し自害をいたした姫君は活を入れても息は吹返すまい、必ず蘇生して下さるか　玄「エヽ重後い必ず承知いたした……　頼「コレ〳〵姫の死骸を是れへ擔ぎ入れろ　○「イヤ〳〵入れるに及ばぬ駕籠へ入れろ　頼「乘物へ入れて何れへお出でおさる　玄「何れへ参らうと蘇生して上げたら仔細は無からうと再び乘物へ死骸を移し　玄「明朝迄は相違無く元の身体にして、連れ参る程に必ず心配いたされな。二人もモート死んだ姫君じやテ鎌倉へ持つて行く理由でもあるまい大方休裁の好い事を云つて是れを出で、途中に乘物を置て逃げるのであらう、彼は鎌倉へ逃歸て仕舞方が安心だと思したから其儘に見居

玄蕃は指揮をして影山の屋敷を乘物を舁出さした時刻は恰好入合の鐘は諸行無常を告げ渡り暇立ち紛きれ斯く云つて乘物を擔ぎ出さしたが固より死したる者を蘇生すべき術とてはなりません……と云つて只其の儘に戻る理由には参らず、途中で色々考がへたが　玄「アヽモー斯ふなれば詮方が無へ事ゆゑ乙姫の首を切つて仕舞をうか、假令如何なる事をしやうとも其の名に因む長崎から松前の果までも人の恐れる長崎家、却へつて管領上杉家より勢ひのある我が主人、其の長崎の家來故彼等が如何に怒らうと亦口惜しがらうと詮無いゝと、乙姫が首刎ねて信義が館へ是れを持出あし仲滿の不在を奇貨に跡の家來を君迫かして俊德丸の首も刎ねニッの首を鎌倉へ持参なし、總と拵まへて差し上ぐれば却つて主人に褒められる、ヲー然ふだ〳〵　大内は家來二人を供に連れ

乘物から姫の死骸を引き出だし頭を刎ねて衣に包み其の儘小脇に掻込んで夜道を急いで段々と來る爰は河内の高安郡、幾内五國の其の内に其の名も高い信義長者が屋敷、實に廣々たるもので御座います……大内玄蕃は乙姫の首をもつて信義方に參いり取り次を乞ひ依つて靜雄といふ侍ひ出で來り見れば孫れて悪人と知りたる玄蕃なれば何を云ひ出すも測り難し殊には仲光氏が不在ゆゑ大ひゐ案じました　靜「みれは何んぞ等の御用にて候か　玄「然れば　靜「イヤ　たりや又何ゆゑ……　玄「然れば　靜「ヤ、是れは乙姫の首級なり靜雄は乙姫は新左衛門樣御主人上杉樣へ御縁組みの御約定も整のひしに俊德丸と不義致たし不届きの至りよつては俊德を鎌倉へ伴れ參り姦通の罪をもつて其の罪科に所せられるものなり内管領の上意斯くの如し聞くより靜雄は假令仲光が不居とも跡

を預かる靜雄あれば少こしも動ぜず　靜「コリャ怪しからぬ御一言假令上意なりといへども證據ありてのみとなるか證據あらば速やかに出し候へ此時玄蕃冷笑ひ　玄「言はれる靜雄とや悟悔致すな其の證據は之れなりと家來に持たせし一包みを取出だし播けば道は奈何に影山が息女乙姫の首級なり靜雄は驚ろき　靜「ヤ、是れは乙姫の首級何故あつて斯くの事に致りしぞ　玄「此度乙姫鎌倉へ伴れ參らんと通りし所ろ俊德丸の不義の致し居れば是れを拒むに依り段々事實を取り糺せば全く俊德との交情姫の口から申しすには仮令此の身は八つ裂きにならうとも俊德殿との交情は斷れ申さぬと之れ則はち證據の一言依つて影山が面前にて拙者首打つたり之れを證據に俊德が館へ參り共々俊德が首打てと姫の頼み然すれは此の世を去つて冥途にて夫婦にさせるも大内が慈悲なりィザ速やかに

取り次げ〳〵余まりの事に靜雄を始め其所に居られた人々も互がいに顏を見合はして何んと答へもあらばこそ茫然たるも道理なり此の際奥の方にては俊德丸俄かの異例信義長者は驚ろき玉ふろれ醫者よ藥劑よ仲滿は未だ戻らぬかと騒はさ立つたる奥の一ト間玄關は大内玄蕃の大音裏と表が一時の騒動所ろへ　親臭よいと〳〵仲滿様お歸へり……聞くより歡喜ぶ人々は直ぐに出迎かい春藤殿能き所ろへ御歸館只今俊德様は如斯〳〵又た大内玄蕃が如左如左と皆おまで聞かぬ仲滿が駕より出づる其の勢はひ　仲ヤア玄蕃影山の館といひ又た是れに來たつての汝んじが一言最早や逃がれぬ覺悟いたせ斯うなる上へは春藤が命のちを捨てゝ師館を治さめん今まで汝んじを生かし置いたも大鳥類母と此の仲滿が武士立つて許りるし置いたぞィサ覺く悟致たせと太刀の柄かに手をかけヲリ

〳〵と詰寄りたり其勢威ひは平素に異つて勇ましく此時玄蕃は最う是れは所詮不可ぬと覺悟おし卒忽々〳〵にして逃げ去りました總べて善道は明るし魔道は闇し其の混雜のお話しは劇場なれば一々〳〵廻り舞臺俳優が變つて動めますゆゑ種々に看せまするが一人りで演ずる講談ゆゑ追々後のちにお分解りになります扨ても俊德丸の病氣直に出入の醫師を迎へ診察させました所ろ何んと名の附けやふもおき難病で御座い升其熱の激しき事宛かも燒金に觸るが如く先づ一服の藥力を盛り醫師も惱いて歸りました開明の今日は實に醫學の進んだる事は諸君も御承知醫業を開くには檢査もあり又は洋航もなし醫生といへど時としては解剖室に入りて是れを實視し種々の御修業で御座い升から能いお醫師も澤山出來まするが其往昔はイヤモウ危險な御醫師も大層ありました俗に藪醫者うれより下の筋子醫

若抔といふのがありましたなら来だ藪にもおれません信義の方には之れより隣國遠處に名を知られたる巧手の醫者を呼び集め種々と醫療を盡さるゝといへど其驗し更らになく其内に俊德丸は段々と相貌も變り顔が潰れて癒りまして宛から柘榴の如く赤くなり眉毛は落ち眼は窪み二目とも見られぬ姿親子の中でも思はしく思はれ枕近くへ倚る者も更らゐ御座いません不愍の御事よと仲光夫婦は御側を退らき昼夜御介抱致して居ります、茲に當國志賀山の奥に住居給ふ禪覺法師と申し三世通達の僧あり之れに御本復の祈禱を願へば法師考へて言る丶は「過去に於て三千人に餓まれたるといふ事あり之れ佛法の悟れる所にて凡人にては相分解らぬ諸神佛へ祈るとも叶はぬ醫術も適はぬ全快を奏はゞ往來繁き街衢へ出て三千の人に見德しめ過去の惡業を遂げ果じなば速かに本復あるべし

之れにて「ふ事更になし」と辞少なに立ち歸るは非凡の僧と見へまする之れより仲光夫婦長者に此事を申上げましたれば長者大きに立腹なし　長者「信義とも言るゝ程の子を乞食同前繁花な地に曝し數万の人の口の端にかけられるは以ての外の事なりと仲光へ仰せられました此時夫婦は詞を揃へ　仲「奈何よも御親子の情は御道理に候へども此儘になし置き御落命の其時は猶更跡の御悲嘆はいかばかり家來の身にて主の子を街衢へ御捨て遊ばせと申すは不忠ゑ似たれ共茲に昔時の御話しを傳へ侍べるに延喜帝第四の宮蟬丸は過去の惡業を遂げ果せられんが爲に御父帝の勅に依つて盲人にならせ玉ふ皇子を逢坂山に棄させ給ふ又天智天皇未だ御位に即き給はらざりし御時相人ありて此君は乞食の相を在しますと相しければ三世過達の佛三界獨尊の御方たりといへども宿業病を腦み給ふ剎利首

陀の隔てなく因果は逃れがたし朕帝位に昇らざる以前悪因を果すべしとて西國へ御下向あつて筑前の國小佐島といふ所ろにて網引の海士に魚を乞ひ給ふ例しもあり帝王の御身すら斯くの如し奚んぞや御家の珂瑙になられ給はんやと理を正して申上げれば仲光が忠心顕はれ長者は御落涙　長者汝じといひ妻といひ彼業病の側らを片時も離れそ介抱致し呉れる其心根は過分なり然れば俊德の身体汝じに委せるとのお詞委細畏り候と用人頭を下げ受けをなし之れより俊德丸を浪華の港街へ伴れ参りまして此業病を諸人に見せ曝し者同様の事に至します之れよりさま〳〵の難りし御話し後席に譲つて述べする

第七席

難波の寺の鐘の響耳に響きて有難く貴賤老若の參詣人群集致する西門の傍らに眺らある餓家根に竹の杖の一ト闘ひ疲を敷いて病はしや世にある時は河内の國一庄の主人にもおらせられたる俊德丸は過去の業病を逐ぜ果さんと諸人に顔を曝されて衣類も搭はず御側に附添ひ秋「奈何に御心持ちがは奈何に在らせられまするやお湯でも差上げませうか　俊「イヤ〳〵よい〳〵今日は大きに心地もよし其方等も嘸疲れつらん二人り共安心して休息致されよ斯く迄苦しき御病中に家來を労はる御詞に仲光は　仲「奈何に若様左様我々へ御遠慮ありては却つて御病氣の妨害け氣を御晴らし遊ばして最はや此地に御出では跡三日にて御國へ歸れまする間御歓喜び遊ばされよと主從三人打解けて居り升る所ろへワヤ〳〵　來る町人共　○ヤア源兵衛はん見おはれ〳〵之れや〳〵是れが業病患や彼顔見なは

れ奇代な顔やなア何んじや知らんが前の世に悪い事為なはつた其酬いや云ふな遠慮もなげに大音揚げ一人りが言へは又二人り三人四人と笑ふて居りました此時見物の後ろより大音にて

男「ヤア館い家体だ俊徳丸樹いて春藤仲光夫婦汝等三人野伏り非人となつたるか日外は能も拙者を恥しめたよい容体が〳〵と有ふ事か口中に含んだ青啖をパッと吐かけ立上つたる侍ひは之れぞ大内玄蕃で御坐います俊徳丸主従はなんと言れるとも腹を立ぬ病ひの為に瞑され居るゆゑ兩眼閉ぢて聞流して悪ふて居れば道は如何に最早鎌倉へ帰り。しと心得へ居りし大内玄蕃仲満見るより立上り

仲「ヤア玄蕃能くも俊徳様の御前へ汝じは疾を掛けたるな最早勘辨相成らん過般見遁し遣はしたる恩義を忘れた大悪人と盲ふより速く疾に包みし一腰を取出して

秋「如何に玄蕃汝しの

なせる悪事の様々日外犬山伴六といふ汝じの使ひで俊徳様や乙姫様を討んとしたる計略を見出したるは此秋篠罪は憎んで人は憎まず平素〳〵本夫仲満より聞されたる事を守つて助け遣はしたるぞよ其れを汝じが心得居りかアイヤ吾夫是れしきの玄蕃妻はが手に掛け殺して呉んと脇差押つ取り詰掛れば

玄「ナニ猪小才な女郎の手向ひ覺悟さらせと斬付る右に秋篠左りに仲満時に俊徳丸殿は

俊「ヤ〻待れよ二人りの者我業病を晒らす内は三人共心は佛になつて呉れ蠱へ魔人であらうとも命は免して遣はせよ……数多の見物は

○「ヤア〻其劔の立合だア強い乞食やなア彼は鎌倉の御侍ひや上の御役人やドエライ事に成るぞへワア〻云ふて見物を致し居り升はや入相の鐘の音は諸行無常を告げ渡る哀れに見ゆる俊徳様仲満夫婦は必死となり大内玄蕃に斬付て其勢ひに大内は道は叮はしと

後退りの隙があつたら遁げ出さんと思ひしも見物を左右へ廻つて現はれたる大の男は菅笠戴だき身には法衣を纏ひ手には太き樫の木の杖猿臂を延して玄蕃の襟髪掴むと見へしが忽ち

ズル〳〵〳〵と跡へ引きエイエ聲かけ抑ゆれば大内玄蕃はドッカリと尻餅搗て殺たりサア道何者か寄席の高座で演る時は跡は明日と云ふのが講談の断場すやそれに速記の講演ゆへ續て言上致ます見物は何も騒で居升玄蕃は

玄「ア、痛い〳〵〳〵

何奴なれば拙者を斯如痛る仮令汝が豪傑にもせよ拙者は鎌倉の新左衛門尉高次公の家來で有ぞ上の權威を以て汝の首は温刻と云さまに金剛力を出て漸に是を振放し二三歩退つて一刀を振冠り

玄「サア笠を脱て名前を名乗乞食坊主の分際で憎く

い奴だ……兎角に官の勢ひを結討とした其時に此方の男は冷笑ひ

男「然れば顔を見せ遣はすだよと言つゝ脱つた菅笠に此

所を劇場で演れば扇屋の店頭て熊谷が編笠を脱ぎ姉輪の平次が腰を扱かす所ろうれと此れとは同じ樣吃驚り愕ろく大内玄蕃

玄「ヤアあれは〳〵御老体には何故あつて其の御姿又い此處へ成らせられしぞ……無礼の段々先平御免……大地へ手を突き其の容体は宛ら蛙の如く伸光夫婦は餘りの事に此方へ下り見上げて居りました時此人ゐう之れなん鎌倉の内管領長崎新左衛門高資の御父君入道おされて圓喜齋殿なり執權北條相摸守平高時若年たるに仍つて因喜殿輔佐し國家安全を願ふといへども遠國には猛悪無道の者あつて他人の所領を横取し又は横逆なる巧みをして難題を言掛け賞を貪ぼり人を惱ます族多しと聞くによつて及ばずながら入道が彼の最期時頼公が民情を視察の爲めか其身出家と姿を換へ國々を廻り玉ふ御事あり之れは過つる事其跡を續いで此の圓喜が國々へ廻る

に就き取り敢へず當國へ來りし所ろ難波寺の邊りへ癩病患が巷街の人に見られつゝ居るといふ事を聞て奈何の煩を掛けしならんと來つて見れば今の容体此玄蕃ふる我悴に娼をなし管領〳〵と權を震ひ憎くき事の擧動かなシテ御身は何人の又夫婦は何者か……と尋ねられたる其折りに仲光夫婦はハッと思ふて　仲「コハ有難き御詞かな之れなる樂病患事は信義長者が子俊德丸シテ私しは其家來春藤仲光妻はは妻の秋篠なり慇懃に禮を正しました側に閉居る大内玄蕃が　玄「コレハ〳〵御隱居圓喜齋樣九刻より過言の數々御許し下され……左は然りながら主命に依つて之れなる俊德を伴れ參らんと心得たる所ろ仲光夫婦が支へるゆゑ據ろなく刀物三昧眞平御免下さり升せ　圓「よし〳〵左やうあらば其方は速やかに此の場を退れ諸事は此方心得居る早々此場を立ち去れ〳〵　玄「然りながら意恨重

なる春藤夫婦　圓「ナニ意恨重なるとはそは私し事なり役人たる者宿意をもつて人を困らせ權威を震ふは之れ壓制といふぞ　玄「達つて退らぬば去らして呉れんとハッタと白眼む入道が擧動に驚ろく大内も殘念ながら何所ともなく退つて仕舞いまし た此際圓喜入道は　圓「痛はしき事かな信義長者の子息ともあるべきに非人の住居も同樣なる小屋の内嘸かし難義でありつらん病症の爲には勝れぬぞへ之れから先は此入道が思ふ事もあれば又逢ませう二人りの者よ忠勤盡せィザ袂別れませふ俊德丸は頭を下げ物をも言ぬ居たりける早や日も西山に傾むきて之れを眺めた人々も我容〳〵と歸りました之れより圓喜齋殿は堺ら定めぬ旅島その墨染の御法衣も人の爲には人を懲し人の爲には義俠を顯はし上役人は斯く致したき物で御坐いまし す茲に俊德丸は禪覺法師の言れし通り之れを守つて此所ろに

廿一日の間我が薬を曝し其願ひ日も過ましたゆえ一先づ館へ戻られましたれ然るに信義長者も何うがなして此病ひを癒したしと八方手を分け名醫を捜し居りましたるに渾べて何藪とも鍛練といふ事が専一何事も其の功積つて必らず妙あり巨勢の金岡馬を画けば其馬紙中を離れて田野に駈け廻り後藤の某し龍を彫れば其龍水を得て虚空に昇ると云傳へ之れ凡骨を離れし薬なるか醫術とても同様なり茲に豫州の住人にて佐伯朱溪齋とて名醫あり壮年より學窓に眼を曝らし黄帝者伯の玄旨を探くり秦の越人の深意をたづね呉國の華陀が術を得て癒りし病ひを俟ちに平癒させぬれば人皆な其神動に服して之れ將さに日本の名醫とあそ竹敬致たし世上に其名高かりしをば長者は聞れて大いに歡喜び早々に家來をもつて迎はせましたサア此朱溪齋が名術にて俊徳丸が業病平癒るか全快らぬか次回を

楽しみに繙き玉へ

第九席

長者は家來鹿潮半右衛門へ申付け遥々と安藝の國へ醫師朱溪齋を迎いあ遣はされました漸々に道を辿りて半右衛門朱溪齋か庵りの前へ佇立み　半「頼み申さん〳〵と二三度呼べと答へなし遣は御空庵にてありつるか誰か御座らぬかと須臾し待居る其所ろへ庵りの傍の樹立より出て來りたる老人あり　老人「何んじやチ、又病ひに就いて迎いの人か……　半「さん候私し河内の者主人信義が子息俊徳丸あるにあられぬ業病にて難儀致し居り升れば何卒御越し下されて全治の程を願ひたし主命断くの如く……　老「アイ〳〵参りて遣らふそ信義は一壮の主人然し醫へ全快なすとても其祓をして半銭一紙の志ざし等は必らず致して呉れるなよ醫術は人を助ける者なり、早速の承

知にて鹿瀬半左衛門も大いに歡喜び早々釣せ來りし轎駕に朱溪道人を迎へなして河内をさして急ぎます然しなか〳〵一日二日路では參れませんに依つては道中の泊りの驛場は長者が金の威光にて充分に饗應しました爰に一ト泊り夜に入りぬれば立提灯所々に燈し立て光り輝やく容体は星の林しと云つべし此處は名に負ふ布忍川と申す所　半「アイヤ御道人今宵は此本陣にて御一泊を願ひ升……

老「アコレ〳〵今見れば道々も提燈の燈火にて道路を照し斯迄美を尽し饗應しては成らんぞよ然れば少し休息せん……轎駕より出でましてお店へ通る半左衛門は主人となつて饗應役兎に角晩餉の準備を致し此時道人

老「イヤ鹿瀬とやら嘸かし患者が待ならん今宵は夜明ぬ其内に此所ろを早足立致すうれに就きては睡りに就ん晩饗を早う濟し申さんと箸取上げた其時に何やら道人が物思ひをなされた

勵ます茶碗をさし置き不審顔自から脈を取つて、ハテ合点の行ぬと獨り言又取り直し見て　老「コレ〳〵半左衛門殿手を出されよ御身の脈を見て進ん　半「是はしたり如何遊ばされた私しは身体健やかにて幼少より一日だに病ひの蓐に臥したる事なし

老「イエ〳〵病ひの際ばかり脈を取るにあらぬ只今少しく異なる事あり早ふ手を出されよ……言はれたに由つて半右衛門は心得ぬ事とは思つだか手を出しました道人は半右衛門の脈を取り又自分の脈を取り　老「半右衛門殿早々此場を去り申さん早ふ準備を致されよ遲だしげの擧動ゆゑ鹿瀬半右衛門は打驚き　半「道は何故の御事ぞ　老「イヤ〳〵此所に居る時は御身も我れも死脈あり急げ〳〵と言るれば駕昇人も之れを聞き道は危險だと言ふより早く乘駕を樣の上へと昇き上げまして早々老人は乘るかと思ひしに　老「イヤ〳〵驕駕にて身体を包むは

恐し跡より舞いて來るべし先に立つたる半右衛門跡へは心も殘さそして兎に角此室を出ました垣根の外まで參りますと又朱溪齊が不審顔　老「半右衛門殿彼の室を離るれば平厥なりや〳〵御身の厥を見んと半右衛門が手を取りましたれも平厥不思議の事もあるものかな彼の住居よそ我身体と鹿瀬が身体討んと謀る山者あり危險〳〵　半「吾が思ふ事俄かに胸に浮んだり、コリヤ〳〵家來御老人を守護致せと二人りの下郎に申付け股立取つて草履を脱ぎ刀の下緒を襷となし引返したる此家の様側折しも何物か天井裏にて音のしたるは怪しけれど大音揚げて半右衛門が　半「ヤア此家の主人は居らぬかと呼べども更らに答へる人なし心は矢猛に速れども相手の知らぬ此の場の体裁時しも表てにて下郎の聲　下郎「鹿瀬様大變なり早ふ〳〵振廻りたる半右衛門が様をヒラリと飛降りて來つて見ば

道は奈何に怪しの山者兩人が黑裝束に覆面頭巾得物を提げて老人の側に立つて居りまし、した見るより早く半右衛門、エイヤと云つた掛聲に一人りを取つて二三間彼方のかたへ圖轉動投られたる山者は道は叶はじと林の中へ逃げ込みました追駈んとは爲たれども未だ一人が老人を斬んとしたる其動靜心は二ッ身は一ッ殘念ながら見逃して此方へ參り　半「ヤア何奴なれば日本の名醫朱溪道人を討んと謀る信義が臣鹿瀬半右衛門ある限りには討ふと云ふても討せはせん刀引拔き斬掛れば大兵に似ぬ臆病者身を震はして　曲者「免されよ〳〵只今申上ん一義もありア、誤まつた〳〵鹿瀬半左衛門樣御身の忠臣に引替へて今御詞にある通り日本の名醫とあらば我國の寶其の朱溪齊を殺ろふとした心の内の汚なき擧動お免しあれと跪坐き被つて居たる覆面を脱ぐより早く兩手を突き謝罪致したる其の者

は折々に長者が家に來つて肥糞汲む肥夫万平といふ者なり鹿瀬は半「ヲヽ扨は万平……ウム……暫し点頭半左衛門　半「アイア御老人嘲かし慈き給ふ御事ならんと機嫌を開けば朱溪は而に笑みを含み　朱「イヤナニ鹿瀬よ……更らに慈ろきはせぬ先刻死脉のありつる時彼の席に居れば不意に討たれ幾ら猛勇の御身にても暗夜の礫は凌ぎ難し二人りが脉を考へて戸外へ出しに身の防衛助くいふ事はありなんと察して居れば慈ろかぬ併し其者が命斗りは助けてやれ下民とあれば何れ慈に輔んでする事ならん流石は非凡の朱溪齋なり　半「奇何にも仰せの通り鬼に角万平汝じ誠の改心ならん俱々之れより長者の館へ伴れ歸り此者を証人として悪人共を取り挫かん勇氣よ猛る鹿瀬半左衛門扨て道々に此の万平を申し出し升るの譯は抑此者が朱溪齋を討果さんと致し升は抑發端に述べました通り

長者には二人りの子あり兄を俊德弟は乙の次郎丸世嗣は俊德丸と極まりましたゆへ繼母の千草が之れを妬忌み我が子の次郎を世嗣にさせんとうれゆる種々の悪計をなし此度俊德が難病を幸はい是れを廢嫡なし乙の次郎が世嗣となし自己が榮耀をなさんがため勘左衛門と悪事を謀り居る内に此の度醫名が來つて俊德の病ひを癒せば元の世嗣之れを支ゆる手術は斯う〳〵勘左衛門が千草と相談にて肥糞汲男の万平へ黄金を與へ頼みし事で御座い升之れを万平より逐一鹿瀬半右衛門へ申し述べました、鹿瀬は下郎が言ふとも己れの胸には充分に此事あらんと判斷を致し居りました是れより朱溪道人を伴れ兎に角館へ歸り朱溪齋は密の譽れあるによつて信義方にても最と敬致されて座敷へ請じ種々の難應に善美を盡し侍過れます、扨て俊德丸の難病の容体を委しく語られ御診察下さるべしと俊

徳丸を召されましたがいかなる思召しにや御座敷へ御出でなく乳母子の民部仲光をもつて朱溪齋み一覽を申し　仲扨て俊徳様には今日は御心すぐれをはやかさねて御目に掛らるべしとの御事にて私しより然るべく申上げよとの御事で御座いますと申すも誠たて信義はへ俊徳病みはうけ給隨を申して見せまじといへども其方能々意見して召つれ出べきに折角遙々遠國より招請致せし醫師に重ての事抔とのび〳〵なる口上を申出は第一朱溪齋先生へ對無禮の至なり早々之へ誘引致せと以の外の顏色にて申されました仲光は唯御延引下れとの御事に候……と申すを聞て半右衛門は進出　半「這は心得難仲光殿抑此度某に仰付れ遙々の所より迎參せし朱溪齋は何故の招請と思はるや若殿の御氣氣の御療治を御願のみ有べき爲めの事ならやや然かるに延引と

の御斷りは其意を得難し假令俊徳様御身を恥らはれ御醫者へ御對顏なされまじと御意なされるとも貴殿眞の忠臣ならば如何ようにも御勸め申上げ一刻も早く御目に掛られ一日片時も速かに御本復をも願はるべきの所ろ最前よりの容体を見るに若殿より貴殿が御醫師様には御目に掛けともなき風情……ムゝありヤ身共が豫てより胸に思ひ當りし事が符合致して參つた……コレサ某しは久〳〵御名代として鎌倉に罷り在り今度登つて貴殿の舉動を察するに一日として其意を得ず先づ第一御宿病とやら業病とやらいふ名を付け數万の人に御顏を曝し過去の宿業病を果させ申さんと群集あゐ彼天王寺抔へ長者の御惣領ともある若殿を乞食非人小屋のやうなる怪しい所ろへ御入れ申し諸人に指さゝせ申俊徳丸の御一分を捨させ申さんとの趣向と發へたり之れは誰れも願み人あるて密かに談らひ

惣領家の若殿に疵を付けて御世嗣にあらぬよふに申備へ置れた所ろへ此半左衛門が在鎌倉の中に朱溪齋の名醫奇妙の話しを聞屆け此度主君へ申上げ迎へ來つて御頼み申し御療治もあらば早速御平癒あらん然ある時は内々企だてし事無に相成り俊德様の御家督にならんとろゐを思ふて俊德様の御意なさるゝとて其方が之りや拒んで御醫師へ御目に掛けられぬものとは半左衛門が見た眼は違ふまじ眞とのない乳母子は細み申さぬ某し若殿の御供して參らん……と立んとするを仲光支へて仲「ありや待て……半左衛門久もう鎌倉に居た積あつて善惡の目利が利て滿足爲たナゼ身共が心の内を見抜たらはかすつて言やと白地に見込んだ通り御主人へは申さぬ幸ひの事を能ろ申した先づ此議論を濟して後に朱溪齋には若殿を御目に掛くべし憚りながら須臾の間朱溪殿には奥の一間で御休息下し

給るべし……と申出れば流石の長者も今日始めて來りし朱溪齋に館の善惡を聞せんも奈何と思案あつて信義は朱溪ゐ向ひ信義「朱溪齋にハ長途の疲勞もありぬべし暫時休息致されよと近習の人々に申付け奥の座敷へ案内致され驅て長者は仲光に信義「とりや仲光俊德を招請の醫師に見せまじとする其方の心底包まゐ申すべしと云れて　仲「私しの心の底は半左衛門が見すかして能く存じ居り然れば彼れに御聞き下さるべしと言はれて半左衛門が進み出て仲光に奈何なる事を申出すか开は次席に讓つて述ます

第十一席

此時半左衛門は形容を正し　半「御邀が差圖を受て申上るよふな男でなし御家の御爲め若殿の御ためなれば打明けて奥れなと頼んでも言ねばならぬ、誠や大奸は忠に似て大詐は信に似た

るといふが其通り表面は忠臣らしく若殿の御爲顔して内實は奸曲しき千師どのと合体なし俊臣手塚勘左衛門と心を一ッにして俊徳丸を疎ませ乙の次郎殿に家督を継せ申し勘左衛門と汝と兩人にて御家を自由になさんとの謀畧此身は鎌倉に在つても心は御屋敷に止め置て疾から見て取つた何んと胸の的に適きり當り返答あるまひィヤ笑止〳〵と冷笑ふ伸光は半左衛門を打見やり泪を流し

伸「御家中に人多しといへども極眞を立て忠義を思ふ待ひ一人もなしと見しゆへ今日まで我心底を明さざりしが今日といふ今我れに均しき主想ひの飯の忠臣を見付嬉いと言ふか頼母いと言ふ只今一人も其方の如き忠義の份弦が慾かりしに今日若殿の爲になる忠の武士を得て御家長久の基と何程か満足致す抑若殿俊徳丸殿と蔭山殿の御息女乙姫君とは人知御夫婦御契約御誓紙取交御中を蔭山殿は御存無

成つよき内管領長崎新左衛門尉高資へ御縁組の御約束結納の御祝儀まで済たる處ろに高資が俟臣大内玄蕃が俊徳丸と姫君の艶聞の媒人後藤左衛門といふ商人に不慮に出で逢ひ始終を聞しに蔭山の家來大鳥頼母辨口を以つて言掠め當分は濟かれども玄蕃は見たる艶聞の趣委細に高資に物語致せしゆへに我儘第一の高資頼みを遣り姫と密通管領職を踏つけにした る行跡當人ともに鎌倉へ招きよせて存分に嬲り殺しにせんと玄蕃をさし登されし砌り俊徳丸と乙姫御前觀花の場より御同道にて私方に忍び入らせ玉ふを犬山伴六といふ者を犬に入置見届け歸るを即座に討つては捨たれ共御出合の容体は玄蕃が耳へも入つらんされば此危難を救ふべき方便なく肺肝を腐まし工夫せしに傅へ承はる唐土晋の豫讓は主人の敵を狙はんとすれ共目見知つて近寄ねば炭を嚥い聲を濁らし面体惣身に漆

を塗つて白癩となり仇敵に近付き遂に本意を遂げしといふ事を思ひ出し若殿に漆しを塗りしに一夜の中に御容貌損ね白癩と見へさせ玉ふ虚病にあらぬ所ろを鎌倉へも知らさん爲め宿業病を遂げ果されなば平癒あるべしと驗者の指揮と申たるも某しが方便態と繁華なる地に出し奉り万人に見せ申ぬる所ろ天道の愛憐に仍つて高貴の親父圓碧齊廻國の序で次第を聞屆けられ玄番が悪逆露顕れ某しに申付られ縄を掛けて蔭山殿へ引渡しぬ是に依つてかさねて鎌倉へ俊德様を召るゝ事もなく御急難を救ひ申すといひ弟一は俊德様御器量勝れし御姿に乙姫御前一ト筋に思し召つき御親父御一家の御意見にても思し召されぬゆゑ世に幾間しき癩病の御顔を御覽あれば思召切つて鎌倉へ御越し有べき者にもあらず是れ癩病に仕立たるの德なり今一ツあは俊德様癩病以の外とあればろ〳〵内より次

郎丸殿に御家督を繼せまゝふと内々斯くの企謀の衆中にも知れ申さんと此三の德をもつて暫時の惡名を付奉り長久の謀略に漆を塗て癩はせ奉れども是は蟹の肉と山椒を合せて塗ば漆の氣散じ元の如くに御全快なさるゝ事は只今にても御本復は最易けれども今少し鎌倉の高貴の容体を聞屆申す迄は先御病人に致し置が御長久の方便にて之あり升る然に今日名醫に診察て若し是は癩にあらず漆にまけさせ玉ふものなれば斯〳〵の藥を煎じ洗玉へなどゝ有て他處にて斯評判致されなば是迄仕込し計略露顕し鎌倉よりは又何なる難儀を申來らんと存ぜ此ゆへに朱溪齋の御目に掛申さゞと一伍一什を打明て申上れば信義殿も半左衛門も確と横手を拍て感心致ました然は信義の妾千草並に勘左衛門次の間の襖の陰に潜耳引立て聞居たりしが兩人ともに顔色替座敷へ入來り端おくも千草は仲滿に向

ひ恨し氣に　千草「俊德様の御爲を思ふ心を碎き人を欺す方便をせらるゝは道理には聞るが癇病人に仕立たるは一は次郎丸殿に家督を繼そふと企謀乘中が知ふとは誰が事を云るゝぞや此程より身を清精進して朝と晩と俊德様の御病氣本復を神佛に祈はすれど怪我にも次郎丸殿に跡目抔とは曉の夢にも思ぬ自らをよくも〳〵我君へ恐様ゝ思はせ様とした企謀の證據があらば見た今出て見られよと盛敵て罵ば其尾に附て勘左衛門眼を見張　勘「千草女郎の御爲には兄分と主君の仰渡されなれば兄弟邪曲の企謀するとは我々かゝる事なるべし諸人を出されなばよし然なくば武士の一分立ぞと詰寄升た伸光聞て打微笑　伸「イヤ〻れは證據までもなし面々の心と腸に聞よ……と云を半左衛門押部て　半「コレ勘左衛門證據を出せば何とせらるゝ　勘「ヲ〻サ證據有ば各〻の存分に成ヲ

面白し〳〵　半左衛門座敷を立つて家來を呼寄せ己れが宅に掘め置たる彼の休み所にて捕へしてれんの万平を御庭前へ引据させて　半「アイヤ勘左衛門定めて彼者を見知りて居らるべし夜前休みし旅亭にて各〻企謀に仍つて朱溪齋の某しの兩人が命を失なはんと致したる曲者なりコリヤ万平昨夜の通り我君へ有体に申上げよと言けれは万平は綱しめられおがら千草勘左衛門が頼みし頭末委しく申上げれば信義殿聞し召され大きに立腹あつて兩人を白眼附け賜ひ　信義「家を亂す佞臣假令女の恩痴にて斯る非道を存じ立つの共意見をも加へ可き臣下の身として同じよふに邪曲を巧む條且つは一家中への見懲しに早々死罪に行ふべしと以ての外の御氣色千草は少しも怖るゝ体なく膝を進めて　千草「妾はが產出した和子に御跡目を續せ度う思ふはありや恩愛の習ひ然のみ非道とは申されまじ漆し

を途つて長病を煩らひ鎌倉の管領職の御目をかすめる仲光が方便といづれが邪曲なる企謀なるぞ鎌倉へ下り理非を明らめ貰ふべし勘左衛門其方に越度はないぞ等一邪正は裁判し貰ふ所ろがあるサアあじやと勘左衛門を伴て座敷を立んと致しま した最早生して置れぬ奴等と信義嘲つと憤ぞふり振打に斬て捨て賜へば千草はキャッと一聲其儘其所へ透さず仲光一刀引扱き捻き周章し勘左衛門を斬り倒し死骸を取片付させまして

一同は　一回今日は最上吉日御家督長久最目出しと万歳を祝し谷々宿所へ帰りました

茲に彼の長崎入道圓喜殿は六十余州を巡ねく経巡り人の善悪を捜ね聞き之れを委敷旅日記に記されて漸やく文保年中秋の最中の頃鎌倉へ帰られ善人には賞を與へ悪人には罰を加へ所謂勧善懲悪の数へに倣つて之れを執行なはれ升るゆゑ聞く人感

じ称美致し自然人の心情温和になり身を慎しみ行ひを正しますよふになりました扨て嫡子新左衛門尉高資よは城之助時頼の息女を迎へ嫁と爲し婚姻も首尾よく調ひ両家の歓喜び又遠近の諸侯聞傳へて我れも〳〵と祝儀の音物ひきも切らず茲に信義長者の方よりも右の歓喜びを賀せんとて春藤民部の允を名代として祝儀の使者に差下さるゝに依つて仲光準備を調ひ祝儀の品物を持て鎌倉へ下向し先長崎父子に到面して賀詞を述べ進物を呈す入道圓喜悦喜て　国はる〳〵の所を祝儀として早速其方を指越るゝ段祝着せり、就ては後徳長過般天王寺に於て異病の容体見届けし上は先達て仰付られし尼御臺御遺忌の御吊かの御樂の役御用捨あれあるやうに高時公へは申上ぐべし心安く存ぜられ心のまゝにゆる〳〵と養生を致さるべしと残る方なき懇切の挨拶ゆへ　仲有り難き仕合せに存じ候

……と心を勇みはや御暇まを申上げて歸國の途に就きました
道路すがら夜に泊り日に歩みて河内の國へ歸り斯くと長者に
復命致しまして茲で俊德の異病は方便なれば早速に平癒あり
上下の歡喜び近々に御家督譲りあるべしと信義には御隠居
せられ新たに別館を立られ扨俊德殿には公卿方の御息女を貰
受け配偶すべしと環て聞繕ろへ幸ひの緣もあらば早速に取組
急に婚禮の祝儀をも調のふべしと有ければ政光承はつて仲
仰せなくとも此方より申上んと存ぜし所ろに御祝言の儀を仰
せ出れ候若殿には内々蔭山殿の御息女乙姫君と人知れぬ御夫婦
の御契約あそばされ置ぬれども長崎高資殿より押て結納の祝
儀を遣されしに仍て是非なく鎌倉へ進られる事に定りしを姫
君悲く思召れ御館を忍出られ私し他行の折柄御馳込遊され余
儀無ク頼に依て女房が私宅に深隠し置奉つり候然ば此度長崎高

けせられし上は憚かるべき所なければ思し召し逢ふたる御中
と申し勇公のかしづかれては恥しからぬ影山殿憚りながら表
立つて御申し受なされ首尾よく御婚禮を頼ひ奉つると申上け
れば信義更らに心得給はす　信ャァ何事をいふ仲滿その乙姫
は過般高資の家來玄蕃が手にかけ首打つて俊德は不義の玄蕃
が邪曲相顯はれ影山方へ汝じに縛しめられ伴れ往けと下知に
まかせ泉州へ伴れ往しに紛れなし然るに只今乙姫存命とは心
得難し……と申しければ　仲道は御不審御道理に候へども
此儀は蔭山殿の家臣大烏頼母と某し天王寺にて最初より牒し
合せ置きたる事にて乙姫君は親御の御揭氣請られ頼母方へ御
忍び御座あると世間へ知らせ實は頼母が妹初花と申すが姫君
と御同年といひ殊に面さしも似たるを幸ひに乙姫御前に致し
玄蕃に渡し遣はせしはたのみまで姫君の事大体にては權威つ

よき高貴殿開れまじき所を察し押はおし手渡しして急郷を過し奉らんとの頼母が思案俊德様を痴漢人に仕立申せし計畧と同じ正真の姫君はつゝがなく愚妻が是まで隠し置き奉つり候と事の次第を物語れば信義長者は感じ玉ひ　信我子に心底を立て貌に背きてなりとも俊德に配偶度とかもひ汝じが方を頼みは是まで忍び居らるゝ姫の心ばせゑう嬉しけれ夫ゑう長者の本嫁なり早く呼迎へて到面せん汝じ歸つて女房に早々是れへさし越せよと仰せられるを仲滿も大ひに歓ぶび急ぎ歸りて姫君に此事を申上げ女房秋篠をさし添へて參られました長者も御歓喜び限りなく種々の御饗應しあつて夜に入り姫君は御機嫁よく御歩行にて歸らせ玉へば仲滿出迎ひ此体を見て　仲コヤ女房無沙汰千万大事のお姫様を何故御乗り物には入らせ申さぬ夜中にひろはせ申す事不届きの至りと以ての外に叱責

責殿には御密所入りければ姫君は聞玉ひ　姫コレ仲滿よ秋篠を必ず叱て給んなや非は道にて餘儀なき事あつて乗物を貸髮た人を是まで乗て來しとの給ふ言葉の通につぎ　秋今宵お屋形より御乗物に乗せまして歸る道にて草原に優しき女子の腹痛にて難儀の体ゆゑ御乗物の中に御薬りがあらば申し受けて給はれと苦しそふに言るゝをお姫様お聞なされ御乗物をおろされ御出有つて提灯を近寄せかの女中を御覧なされしに爪端眼しからぬ標緒も解れて風俗花麗に髪容形眼しからぬ容体に子細を直ぐ御尋ねありしに美くしいも道理道は堺の廓内乳守りの領城にて此女子に身を打捨て行衛しれぬ其中に大盡の請出して宿の妻におさんと身受けの金を親方へ渡し今宵廓内出る約束假令如何なる有徳の人の奥様になればとて言変せし事の深い男の外添ふ事嫌と分別きはめ今朝暁方に廓を抜け出

て當所もなく深間の男を尋ねるも習はぬ旅の癪氣起り胸先痛みて一寸も歩行き難しと段々の物語りを御聞遊ばし姫君の仰するには秋篠よ流れの身にて思ひを立る心ろざしは例しあい事我が身につまされ思ふ男を慕はるゝ心根が慈しい仲光へは其方よいやうに云ふてたもゝりや此女郎を身に替へて隠さふて深間の男を尋ねて夫婦にして遣り度と達つての仰せ如何さまお姫様の御身の上に合はされて慈しう思し召も御道理又此方様とても斯んな事聞いて情けをかけぬお氣性でもおいゆえお叱りも有まいと思ひ如何にも御伴れ遊ばせと申上げたれば御歎喜びあてお怨はお歩行遊ばし其女郎を此乘物あのせまして是れへ御伴なされましたと一伍を語ります仲光は打點頭き仲〻如何様御隠まひなくてはならぬ所ろお出來し遊ばした先づ之れへ出し暇たかにして發生をさせませと秋篠に云ひ付

け介抱致させましたお休み遊ばせと云うより御座敷へ彼女郎を通さるれば流石人なれたる者ゆへ怖せそうれへ座し秋篠は盞を持ち出て　秋「お心持は能う御座んすか爰はお姫様の御家來仲滿殿へ申して妾はが本夫の家ちつとも遠慮て入りませぬ綴りと逗留あつて思ふ殿御の行術を尋ねられよと懇切に云ふを聞き　女「有難うぞんじ升お姫様のお情け生〻世〻御恩は忘れがたく添なう御蔭によつて腹痛も快よく平素あ替らぬよふになりましたゆえ御氣遣ひ遊ばしくだんすな……と女同士の打解けて盃の數もかさなり夜も更けたれば翌日また御目にかゝらんと姫君奥へ入らせ給へば秋篠は一間をしつらひ彼女郎を休ませましたが必竟此女郎は奈何なるものか善か惡か余り長く相成りますから次席に讓つて辨じ升

第十一席

茲に信義が館にては思ひ當れば過つ頃俊徳丸乙の次郎丸等鎌倉よりの命令にて萬秋樂の其舞ひを尼將軍が百年忌に奏樂を仰せ付られるに付き右舞を受け頼ぐが爲め舞の名人富士かる者を招き傳授致せし其夜さに圖らざりき富士は横死を遂げて恰好りの三年忌に至るを以つて追福を吊はんと長者が御深意のはせ千草は申すに及ばず臣等一同も歡び奉つり中にも春藤仲光か掛りを仰せ付られ天王寺の樂人其外名を得し伶人を集め御菩提所來迎院に於て舞樂の御催しがありました此時俊徳次郎の馬君万秋樂を舞ひさせられそれには樂人大勢も居並び美々を尽して興に入り奈何にも優しき御擧動で御坐いますかし亡者は歡ぶならん舞は畢りて人には舞臺を離れん其時に太皷役の箱より劔を拔持ち春藤民部允仲滿が側へ走り寄り

女「奈何に仲滿吾夫の仇敵憂へあらんと斬かけたり、春藤ヒラリと体を躱し劔屬をもつて受け留め　仲「奈何あればよろ仇敵呼はり今まで他人に仇受げし覺へなし何故ふるぞ物語れ子細を聞んヵザ〳〵　女「覺へなしとは恨めしやと若たりし烏甲を取れば四五日以前乙姫君御輦駕にて伴れ飯られし乳守の傾城なり今伶人の妻にて民部允を狙ひしは奈何なる人で御坐いませう　仲「ヤヽ汝じ吾れを討んと計りしか今いふ通り己が名をいふて聞せいコレ城傾　女「ヤア仕損しなしたか殘念な今日の忌日たる富士殿の爲には娘則ち三保松左京之進が妻の梅かなるぞ富士樓を我夫左京之進が討しとは僞造事の一ッにて我夫をは其方が長者の命にて首打しと聞より妾はい氣も頓倒然すれば和郎は父の仇敵仮令賤しき遊女にもせよ大小を手狹む三保松が妻であるゆゑ討んとしたる謀ひも空し

くなりしは殘念なり之れ丈けいふたら仲滿殿事の仔細は分解るであらう此度圖らずも當館へ入り込みしは幸ひと今日此賬はひの混雜紛れ恨らみを晴らして三ヶ年の艱難辛苦を名乘んと思ひしも斯うなる上は是非もおし、サア春藤民部生きて甲斐あき梅が技だ命速かに首打れよ冥途へ參つて父上や我妻に謝罪なさん果弱き女の腕前ゆゑ返り討は覺悟の前で御坐んすぞ

仲「ヲヽ健氣なり天晴れあり列びし人々此婦を見よ只一口に浮川竹の勤めの身賤しき遊女と誹れども其中にも此婦あり兎角女あり適ばれなる御身が一心恨らみあらば討れもしようが心を沈着て吾が云ふ事を聞候へ三保松左京を罪科に行なひしは國の掟家の法罪あるものは罰するは人倫の道ゆゑに爲たる事ぞヱテ富士を討又左京をなき者に致したと誰れより聞た其方の心より出のでは有まいと事を分解る春藤が理道詞梅枝は夫

れも然ふかと心を沈着け懷劍うれへ投げ出して

梅「如何にも仲滿樣御身が我夫を討つたといふ又富士殿をなきものにしたといふは妾の爲には姑女の千草樣と御立の御家老彼勘左衛門樣の御二人りが具さに私しへ仰せ聞られました皆まで言せぬ仲滿が元より自分は然もあらんと知りたる事故梅ヶ枝が口を押へて

仲「モウよい〳〵皆迄云ふな〳〵今に仔細が分解るを

よ此切のせり合奈何にならんと列居る數多の人々は片唾を呑んで眺めたり此時俊德丸が先刻鄙樂の其際り後見なしたる一人の樂人之れも衣裝に姿形容は變じて居るゆゑ誰れも氣の附く者はなしその樂人が進み出で……

樂人「待れよ梅が枝嶌初より其方の貞節見るよりも心の内に滿足せり汝じが本夫三保松左京の進たるぞと冠りし物を脱つて進み寄る余りの事に梅が枝は手の舞足の踏所を失ひ

梅「ヤア〳〵吾夫左京樣で

おわしますか死したと思ふに今此所へ御出でゐさりしは吾夫の魂魄かそれとも今迄存命て御出ゐされし事なるか左京様イのふ吾夫イのふと四邊り捜はゐ夫婦の情互いに手に手を取交し嬉しいに附け悲しいにつけ先立つものは涙なり此時春藤仲満が　仲「奇何に侮が枝殿之れにて仔細も分ぬ事りしなら三保松左京之進を討しとは掟の表と裏へ廻れば春藤が厚情によつてお助け申たサア此上は左京殿御夫婦父富士殿が仇敵をば之れより穿鑿なされかしと善悪邪正神分けし忠義一途の民部の尉並居る人々一同に涙ろ泪を催ふしける、折しも杉戸の陰にて

○「アイヤ仲満殿富士が仇敵を探すに及ぬ御子息三保松左京之進の妻の梅が枝より富士を討つたる其仇敵は則はち我れにて候なりとて徐々として杉戸を開け入来りしは別人ならぬ之れぞ今にては後徳次郎の両名が師匠と頼む樂人浅間で御座いま

した此浅間といふ人は其年間及富士と肩を列べ日本の樂人にては此二人うで御座いました然るに万秋樂の舞ひといふものは富士の家の秘密の傳書他の者へ譲らぬ一子相傳九とも徳川政府の頃、観世寳生金春喜多それに梅若野村泉抔いふ能役者がありました其家々にて一ッの奥儀といふ物が御座い升之れ同一の事にて然れば浅間の家には此万秋樂の舞ひは御座いません是れを浅間が平素〳〵幾念に心得て居りましたゆゑ富士が信義長者の子息に傳授ふすといふ事を聞き密かに忍んで遥見なし此舞ひを盗んだゆゑに富士なき後は吾が思ひ通り雨君の師匠となり鎌倉までも名を躍ろかし思ひ通りになりしかば今は樂人の長と成つて居りました此講談の發端は此邊はゑしく講じて設きました夫は扨置き三保松夫婦浅間の一言に驚きまして　両人「父上を討ちしは浅間どのなるか仔細を早く語り

玉へ　淺「さん候彼の際御身も様側にて俊徳丸殿へ富士が傳授の万秋樂左京之進も隙見被成たであらう然るに誰やら人の足音見咎められては相成らんと其場を去つた此淺間御身は知らぬに居つたるかと鄭の手拍子足踏みまで腹に墨んだ其上は富士さへなくは淺間ひとり淺猿しひ凡悩の心より稽古畢つて富士殿が様を降らぬ其折に討ち果したのは此淺間今之れなる貞婦梅ケ枝が柔弱き女の腕前に親の仇敵又本夫の仇敵討んとおせる志し遂ばれとも健氣とも雲めようもなき梅ケ枝女圓らせもはが改心の時節に至り斯く尋常に名乗る上は速かに父が仇敵三保松御夫婦首打よと頭を伸て覚悟の有様そなが女の事ゆえに梅ケ枝は屋の仇敵親念せよと又取直す劔を確と打ャレ待よ梅が枝左「如何に淺間殿親の仇敵と言ながら自首致たる御身をば然ば左様と討様ふ左京には之無ぞやレ早

るな梅が枝淺間が父富士を討ちしは其道に依つて其鄭を盗むといふ無蓋の熟人佛法で云はゝ因果因縁其父が三週忌に討ち御身も追善の鄭に加はる人なればうれを討つよふふ左京にあらば我耐忍を人々よ愛して給はれ哺仲光と年若なれど三保松が詞に淺間ば泪を飲し　淺「イヤ〳〵斯く首さし伸た淺間ふれば討てや三保松御夫婦よ左は然りながら免されたる我罪を又思ひ返して討ては爲まいと暫し默して居たりしが何思ひけん先刻梅が枝が持つたる劔を取るより早く己れと咽を貫ぬいたり　仲「ヤア早まつた淺間殿今左京之進が堪忍の辭を忘れに春藤も聞て感心おしたる際止めるの間もなき御身の自殺サア左京どの苦痛をさせるは却て不愍程悟なしたる淺間ふれば首打つて孝子の心を顯はし玉へ此時淺間も苦しき息を吐きふがら淺「仲光殿三保松夫婦も早ふ〳〵　仲「淺間殿冥途へ土産に能き

事聞せん俊徳君は過つ頃業病に掛りしも今では全たく癒なされ又罪科に處せられしと思ふ左京之進殿は拙者が發心で存命なし遂を企謀む人々は追付け其罪を糺されて勸善懲惡の道は天明らかにして照され殊に仁今日富士殿が三年忌其當日に御身も命を捨られしは之れ、ぞ浮世の道理なり之れにて思ひ直く事御坐るまじ……淺有難う仲光どの然らば此世の御別れおりと一言いふて息絶へたふ驛の物で斯く演じますと全で劇場か淨留理にありそふな所ろですがろうが夫れ鎌倉時代の事なれば頑固もあれば無粋もあり看客宜しく御免し玉へ

第十二席

三保松左京之進夫婦之れにて親の仇討も濟み俊徳丸は罪は憎んで人は怨まず淺間自首に感心なされ一度師匠と仰ぎし人な

れば最と可哀に當院へ歸つてお遣り被成ました之れにて富士と淺間の山競べ何れが高く孰れが低きの論もあく後世までも樂人の譽一を殘す富士淺間扨て是れよりは暫らく絶へて居りました彼の大内玄蕃景虎が今淺猿しき營業の御話し追〳〵此講談の結局りを開演致します、世の中に狼の菌の療治すると盜人の渡世ほど危險いものは有まじ生命を的にかけて當るものを幸ひにたゝ取商賣今もしれぬ身とは思ひながら日頃の積惡身をせめて三界ひろしといへども一身を置くお所ろなく野に伏し山にかくれ一日ぐらしの盜人業くはぬが悲しく近き頃迄大内玄蕃景虎と主の威光を笠に着て諸武士に執せられて自ゴから奢侈つき種々の貪慾つもり〳〵て天の網かゝる細目の恥辱にあい泉州までひかれしが陰山長者長崎入道圓喜の下知とは云ひながら殺しては子息高資の手前いかゞと遠慮して命を

助生け路を取らせ和泉の國を追はらはれ鎌倉へも仮られゝたよるべき所なければ盗賊の頭となつて數多の眷族を諸所へ追し夜盗山だち追剝欺偽りあらゆる盗みの働きさせ其上前を取て其日を送り居るといふのでされば類は友をもつて集る習ひ手塚勘左衛門に顧まれ名醫朱溪齋を休所にて殺さんとして半左衛門に捕られたるてれんの万平是も命ばかりを助られ河州の國内を追放せられ今玄蕃が手下の盗人となつて此間阿部海道へ出て追剝は大鳥頼母に切付られたうしろ疵養生して暫く引て居ましたが程なく平癒して玄蕃が隠家へ來ていふには万一只今河内の者の評判を聞升るに明後晩京都伊駒の中將殿を申す公家衆の姫君俊德丸の方へ嫁入ある由此姫と申すは實は影山の息女乙姫御前なるよし偖に承わり候ゆへ道に待伏て嫁君の乘物を奪取直に鎌倉へ具て御下向あり御舊君高資公と右

を仰せ上られなば以前の御誤りは自然と晴れ御勘氣免れて又昔しの本領御安堵なされんは鋭にかけて見るがごとし早々手下の者の内に力量業よ達せし一騎を招かれ道の難所に待伏せ居らば乙姫を取り得んあと最と安かるべし早く思し召立給へと聞いて玄蕃は大きに歡喜ぴ　玄「コハ究竟の事を聞出し來たりしぞ之れ速を開き再び出世をすべき瑞相なり山で來したり〳〵時を移さず眷屬共を呼び集めんと手寄〳〵の盗人共に觸れをなし大勢をゑろ招きましたる所の刻に信義の館へ御乘物を入らるべきとの手筈あるに依つて則はち中將殿の領分高立が原の別館へ前日より姫君をつし女中附屬の者花を飾り之れより御嫁入の御準備万端を最と美々しく致され行烈を亂さず若侍ひ二行につらなり錦をかざる晴れ小袖御所染彼衣風に飜めき御乘物御腰添前後に取囲

ささんざめかして行所ろに洞が峠の松蔭より甲頭巾引きかぶり腹巻したる究竟のあぶれ漢數十人現はれ出大音に

男「ろれに見へし乗物は影山長者の娘乙姫なるよし先達つて似せ者をよしらへ乙姫と偽はり管領職の目をかすめ縁談の約を變じ今日俊德方へ嫁らす段鎌倉へ聞へ高資を聟に嫌ひ上を欺むく職動長崎新左衛門の尉殿以ての外に立腹あつて急ぎ乙姫を召し伴れ來れへ我々に仰せ付られ迎いの爲に今朝より是に待つ事久し早々乗物を此方へ渡せ異儀に及ぶと一人も生ては置ぬと口々に呼はりました介添腰元其外の女房達は怖ぢ恐れ身を震はせ如何はせんと騒ぎ立つ此時御輿添の大烏頼母

大烏「イヤ慌ッくい山賊共もめが偽はり捕で切にして呉れんと思ひしが御怪我さしましては大事……

ヤ待て左様な事して自然御乗物の中へ石など打込れ姫の君に

とはやる心ろを押静め詞を和ら

げわざと悠々として出迎ひ

女白菊姫河内の國信義長者

御嫁入影山殿の姫君なゝは大

ひなる間間遊ひ定めし此邊の野伏ども御婚禮の御祝儀を申受

んために來りしと愛へたり依つて汝等にも祝ふて庭錢を下さるゝ有難く頂戴して道を開いて御乗物を通すべしを跡に持せ

大烏「是は、都伊駒の中將殿の御息

し長櫃より島目十貫文取出させ彼者どもへ與ゆれば玄蕃は錢を追つ取つて頼母が前へ投げ返し甲頭巾を脱つて

玄「見わすれたか頼母高資の家臣大内玄蕃なるぞ浪人はしたれ共目腐り錢の十貫や廿貫を目がけ影山なぞが祝儀を貰ひに來る玄蕃にあらぬ過般は似せ物をかつがせ主君れ親御長崎入道殿の御機嫌に背かせよふも〳〵浪人させたな身上の敵といふは汝れと仲滿生涯の内には此恨み晴さんと思ふ所ろに此度伊駒まをやらまげ駒とやらいふ公家を取親にして俊德と娶合すとの仕組

今日此所を通ると聞き天の與へし悅喜しく諸浪人を語らひ峠に待ち居たり早く姫が乘物をわたせ之れより直に鎌倉へ押し立て次第を申上げ會稽の恥辱を雪ぐふたゝび本地へかへる思案いなといふと皆殺しにして谷の埋草となすサアきり〳〵せと置しり立るを頼母は今は堪り兼

大鳥「ヤア恩知らずの人畜め日外や聞喜公より己れを綱られし縄めに存分に行たへとの自筆の送り狀を括り付けて遣はされたれども寛仁大度の影山長者死罪を宥めたすけらるゝのみならず路金までも下し置れた御厚恩を忘れお姫様の御婚禮の邪魔をひろぐ曲者一寸も其所動かさじと刃を抜いて打て掛れば安かしみの木蔭より盗人ども涌が如くに出來り手向ひせば打殺せと得物〳〵を引提げて群ゐり來るぞ夥多じ流石の頼母も目に餘まる大勢なれば少しあぐんで居る所を麓より大勢の騎して來るを敵かと

見れば道は之れ信義の執權春藤仲滿鹿瀬半左衛門家中の大勢引つれ來り　仲「氣遣ひめさるな頼母殿彼奴等は我々にまかされ御姫様に御怪我のないやう御乘物のお側を離れず往れよと同をかけ盗人共に渡り合ひ無二無三に斬捲り當るを幸ひ薙ぎ立る此勢ひに辟易して谷峯を飛び越へ蜘蛛の子を散すが如くいづくへか逃げ去りました半左衛門は一番に逃げゆく万平が首筋つかんで引戻し松が根に押付け引首ぬいて捨たりき玄蕃は此体を見るより肝をひやして落行んとするを仲滿見付け後よりハタと賊倒し生捕つたりと早縄に引縛り引立て來り乘騎の前に引据へ　仲「斯る目出たき折なれば助けたきものかれども此奴姫君の御事を兎や角く吐せば末々まで兩家の障害物なれば此度が能い仕舞ものなりと頼母もろとも太刀抜き持ち仲「御國御家の悪魔めと首打落し莞爾と笑み　仲「今朝玄蕃が此

所へ待ぶせすると告知らす者之ありしゆゑ半左衛門氏と申し合せ取るものも取り敢へず駈け付け來りし甲斐あつて　大島姫君の御乘物にも狼藉をなさゞる内に御兩所の御出ありしは祝着の至り　半「ふ役に立し嬉しさよ　半「イヤ先づ片時もはやふ道を急がれ目出たう御輿し入れ申さんと半左衛門と前後を守護し信義侯の御館へ入奉つり御姻姻首尾よく整のひ俊德丸と乙姫の御交情も最と睦ましく幾千代も替らぬ色は相生の松よう榮へ榮ぞ茂る治まる御代の時津風家門繁榮氏安全と賑はひまする……御退屈様

俊德丸

大尾

附言　扨て此俊德丸のお話しは講談社會あり從來から演じ升るものは稀れで曾つて聞かない所ろで世に俊德丸の傳記をよく演じますのは淨瑠璃ぶしか祭文語たり抔が演つたもので同業の内にて高座で語まない語演を文事堂の御注文ゆゑ種々原書の如きものを尋ねましたが世に喧炙されては居り升が信義影山の兩家は北條執權高時の代に國々に長者と稱なへられしものは德川の諸侯の如く一國或るひは一郡一莊の主たりし者で御座いますが其の年間の事實を云ひ傳へ來つて淨瑠璃や浪華ぶし上州祭文に殘りて想像的に書顯わした俊德丸なか〳〵私くし如き無學なる者が是か非か判別する事は及ばない事で御座い升か先づ眞に近き實譚を受賣り致し升る筆くば斯んな事實が有つらんと看客の慈眼に御好評有らん事を茲に御願はり申上げき升る

明治卅年七月十日印刷
仝　年七月十五日發行

東京市淺草區彌富町廿九番地
柴田貞事
講演者　錦城齋貞玉

同　神田區佐久間町三丁目卅八番地
發行者　市川路周

同　神田區鍋町廿四番地
印刷者　横田磯吉

同　神田區佐久間町三丁目卅八番地
發行所　文事堂

版權所有